
コンビニ夜話

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニ夜話

【Nコード】

N0041R

【作者名】

橘伊津姫

【あらすじ】

夜道のドライブで立ち寄ったコンビニ。
そこで出会った日常ならざる出来事。

『またのお越しをお待ちしております』

今宵もコンビニでは摩訶不思議な光景が
繰り広げられている事でしょう……。

第一夜 道案内

第一夜・道案内

「やつぱり、新車はいいよな。この新車独特の匂いとかさ、堪んねーよ」

「はいはい、分かったから。ちゃんと前向いて運転してよね」

日付も変わろうかという深夜。一台の車がヘッドライトを皓々と光らせて、夜道を駆け抜ける。

車内には、一組の男女の姿がある。

「ねえ、ところで、どこまで行くの？」

助手席の女が、嬉しそうにハンドルを握る男に声をかけた。

元より、目的があつて出かけたドライブではない。あてもなく走り回つて、女の方はすっかり飽きてしまったようだ。

車はどうやら一般道を外れ、山の方に向かう道に入ったように思えた。乏しい光量で確認できるだけでも、周囲の様子は違っているのが分かる。

「そうだなあ。このまま行くと、山の中だし」

土地柄、そうそう高い山でもない。二、三時間も走れば、越えられるだろう。

「ただ走つてんの、いい加減に飽きちゃったよ。行くあてもないなら、もう帰ろうよ」

女の方は明らかに不機嫌になっている。

「まあまあ、そう言うなよ。せっかくの新車なんだしさ。どっか心靈スポットとか探そうぜ」

せっかくの気分を壊されたくないのだろう。どうにか行く先を見つけて、もう少し走ろうと彼女に提案する。

『心靈スポット』という単語を聞いて、女の方もちょっとは気持ちが動いたようだ。しぶしぶといった感じで、男の案にうなずいた。

「近くにコンビニとかねえかな？　そしたら道とか聞けるんだけどな」

「えー、ないんじゃない。こんな山の中にコンビニなんて」

「そっかあ？　案外あんじゃねーの。結構、ビックリするような場所にあたりすんじゃないよ」

そんな話を話しているうちにも、車はどんどん山の中へ入って行く。

CDの音量を上げ、山道を青白いライトの光で照らしながら快調に車は走った。まるでハンドルを握る男の気持ち、車そのものを動かしているようだ。

音楽に合わせて小刻みにハンドルを指で叩く男の視界に、小さな灯が飛び込んできた。

「あ、あれってコンビニじゃね？」

見れば確かに、コンビニエンスストアの看板だ。聞いた事のない店の名前だが、町中に良く見かけるコンビニチェーンとは縁のない、個人経営の店なのだろう。

「あそこで道聞くついでに、何か買って行こうぜ」

ウインカーを出し、駐車場へ向けてハンドルを切ると、シートベルトに手をかけながら女もホッとしたように口を開いた。

「じゃあ、あたしもトイレ借りてこようっと」

時間も時間だけに他に客がいる気配もなく、駐車場にあるのも自分達の車だけだ。

ドアを押し開くと、おなじみの電子音が来客を報せて鳴り響く。

こんな時間に客が来る事も稀なのだろう。奥からお顔を出したのは、くたびれた雰囲気の中老の男性店員だった。

「いらっしやいませ」

聞き取りにくい低い声で告げる。

「あの、トイレ貸して下さい」

店員に声をかけると、指差された方へ女は姿を消した。男は飲み物を購入しようと、ドリンク・コーナーへ足を進める。

眠気覚ましのためのブラックコーヒーと、連れのための紅茶を運び、レジへと向かった。財布の中の小銭を確かめながら、商品をレジ袋へ入れる店員に話しかけた。

「ちよつと聞きたいんですけど。どっかこちら辺に、『心霊スポット』とかつてないですかね？ もしもあつたら、教えてもらいたいですけどね」

支払われた小銭をレジへ仕舞った店員が、男の言葉に顔をあげた。その表情は店の照明のせいなのか、心なしか青白く見えた。

「『心霊スポット』ですか？ そうですねえ、あんまり聞いた事はありませんが」

そんなやりとりをしているうちに、トイレに行っていた女が戻つて来た。

「ほらあ。ねえ、やっぱり帰ろうよ」

楽しみがなくなつたと思つたのだろう。一気にテンションの下がつた女は、男の腕を引つ張つて店を出ようとする。

「まあまあ。『心霊』っていう程のモンじゃないですが、それなりの場所ならありますよ」

二人の様子が険悪になりそうなのを感じ取つたのか、店員が口を挟む。

「どこですか？」

男の方も、これ以上彼女の機嫌が悪くなつては叶われないと思つたのだろう。店員の助け舟に飛び乗った。

「ここから、そう遠くないですよ」

そう言つて、店員は聞かれた場所までの道を教えてくれた。

「この道は一本道だから、間違える事はないと思いますけど」
聞いた限りでは、複雑な場所でもない。

三十分とかからず辿り着けるだろう。

「ありがとう」

あまり乗り気ではないらしい彼女の背を押して、男はコンビニを後にした。

「ねえ、本当に行くの？」

車に乗り込み、男の手から紅茶のペットボトルを受け取ると、キヤップを爪で引つ掻きながら女は言った。

「もういいよ、帰ろうよ。さすがに時間も遅いしさ」

「何言ってるんだよ。せっかく教えてもらったんだろ？　ちよつと行くだけだからさ。見るだけ見たら、帰るよ。それでいいだろう？」

「本当に？　ちよつと行くだけだからね……」

「ああ、分かっているって」

本当に分かっているのかいないのか。

女はアクセルを踏み込む男を横目で見ると、ため息を紅茶と一緒に飲み込んだ。

車は再び夜の山道にヘッドライトを輝かせながら走り出した。

相変わらず、対向車は来ない。

「さっきのコンビニだけど、こんな何もない場所で営業してて良くやっていけるわね」

変わり映えのしない窓の外の景色を眺めながら、女は先刻立ち寄ったコンビニの話始めた。

「お客さんなんて、来るのかしら？」

フンフンとBGMに合わせて鼻唄を歌っていた男も、その言葉に反応した。

助手席の方へチラリと視線を流し、女の機嫌を伺うように言葉を発した。

「んー。でも、隣町へ向かうトラックの運ちゃんとか、案外利用するやつっているんじゃないの？」

「そっかなあ」

「夜中に一般の車で来るヤツがいなかったら？　俺達が知らなかっただけで、配送やつてる連中には知られてる店かもよ」

会話をしている二人の前に、山を下って行く道と、それとは別に更に山の奥へ入って行く道とが現れた。

「ここだな」

教えられた通りにウインカーを出し、山の中へ続く道を選ぶ。

かろうじて山道を照らしていた街灯の光も途切れ、ただ月光とヘッドライトだけが行く先を示してくれる。

「やっぱり、やめようよ。何だか良くない気がするし。ねえ、帰ろう、ねえってば」

深夜の山道、しかも灯りもない暗闇の中を進むにつれ、女の心に不安が押し寄せてきたのだろう。しきりと先へ行くのを嫌がった。

「ここまで来て、そんな事言っなよ。もう少しで着くんだし、行ってみるだけだって言ってんじゃん」

男は内心で舌打ちしながら、女の様子を伺った。

「だって嫌な気がするのよ。行きたくないわ。うまく言えないけど、行っちゃいけないって思うの。お願い、帰りましょう」

きつと、ドライブに飽きて帰ろうと言っているのだろう。そう考えた男の予想に反して、女は本気で嫌がっているようだった。

中身の残った紅茶のペットボトルに口をつけようとせず、青い顔をして肩を抱いている。

「一体、どうしたってんだよ」

道が暗いために、前方へ向けた視線を動かす事が出来ない。幸い、後続車も対向車もない。スピードを落とすと、車を路肩に寄せてハザードを点けてサイドブレーキを引いた。

「そんなに、行くのが嫌なのか？」

彼女の顔を覗き込む。

「嫌なの。嫌なのよ、行きたくないの。お願い、帰りましょう？」

女の表情は、これまで見た事がないくらいに青ざめ、強張っていた。

「そんな事言っただけで、もうちょっとじゃないか。少し行っただけだよ。な？」

男の興味は、教えてもらった『心霊スポット』に大いに傾いていたが、連れの尋常でない様子に迷いが生じたようだ。

それでも「せっかくここまで来たのに」との思いがあるのか、食
い下がってみる。

男の言葉を聞いた女は、キツと顔をあげてシートベルトに手を伸
ばした。

「じゃあ！　そこまで言うんだったら、一人で行ってよ！　あたし
は帰るから！　ここで降りしてっ！」

彼女の剣幕に、男はわずかにのけ反った。シートベルトをむしり
取るようにして外し、ドアのレバーに手をかけた連れをなだめ始め
た。

「分かった！　分かったから、そう興奮すんなよ。帰るから落ち着
けてっ！」

今にもドアを開けて外へ飛び出しそうな女の腕をつかむと、男は
約束した。

「本当に？　もう行かない？　帰れるの？」

余程気が昂ぶっているのだろう。目に一杯の涙をためて振り向い
た彼女の姿に、男の『心霊スポット』への興味が急速に萎えていっ
た。

第一、普段の彼女は、これ程に取り乱す事などない人間だ。その
彼女が、我を忘れるくらいに怯えている。

男自身は何かを感じている訳ではなかったが、これ以上、女の神
経を刺激するのは得策ではないだろう事は理解出来た。

「ああ、安心しろ。お前の言う通り、もう帰るから」

気持ちを落ち着かせるために笑いかけると、男はサイドブレーキ
を戻した。それを確認した女も、ホッとしたのか小さく微笑みを返
す。

改めてシートベルトを装着すると、まわりつく空気を払うよう
に軽く頭を振った。

「大丈夫か？　じゃあ、行くぞ」

暗闇の中を透かして見ても、車をUターンさせるための路地など
見当たらない。助手席の女が先に進むのを拒んでいる以上、この場

所でＵターンするしかないだろう。昼間ならいざ知らず、夜の闇の中を分岐点までバックするという方法は、絶対に御免だ。

幸いなことに車は小回りの利く軽自動車、他に車が来なければ、数回ハンドルを切るだけでＵターン出来るだろう。

気持ちが『心霊スポット』に行く事だけに向いていたので分からなかったが、ガードレールすれすれまで近寄ると、その外は崖になってるのが見てとれた。

さほど標高のない山とは言え、けっこうな高さだ。車ごと落ちれば無事では済むまい。

時間と手間はかかるが、安全を考えて慎重にハンドルを操り、車はＵターンを完了した。

元来た道を辿り始めた車内で、女は心から安心したように大きく息を吐き出した。

「ありがとう。ごめんね、わがまま言っつて」

「もう、いいって。行っつたって楽しめねえんじや、あんま意味ねえし」

分かれ道まで戻り、自宅のある方へと曲がる。

しばらくの間は、何となく気まずい雰囲気車が車内を漂う。そんな空気を断ち切るように、男がことさらに明るく言葉を発した。

「しかし、あれだな。いい加減こんな時間だと、腹減らねえ？」

言われて時計を確認すれば、デジタル表示は深夜二時近い。

「そうだね。でも、この時間じゃ開いているお店なんて、ないんじゃない？」

「だなあ……」

自宅付近まで帰ればファミレスもあるが、これからだと店に着くのは三時頃になってしまう。

「うーん、これ以上遅くなってから食べると太るよね、やっぱり」

ようやく、二人の間にあった空気が、いつもの「日常」に戻った気がした。他愛のない会話のおかげで、女の顔にも落ち着きが見える。

「なら、さっきのコンビニに寄って、何か軽くつまめそんなモンでも買うか？」

「そうだね。今から開いてるお店探すのも面倒だし。そうしょつか」
おにぎりでも菓子パンでもサンドイッチでも、二、三個買い込んで車の中で食べれば、家に帰り着くまでのつなぎになるだろうし、腹もそれなりに満たされる。

男と女は笑いながら言葉を交わし、ほんの三十分程前に立ち寄ったコンビニの灯りを探した。

だが、見覚えのある場所までやって来ても、肝心のコンビニの看板は見えてこなかった。

「あれえ？ この辺だよなあ？」

「うん、確か、この辺りだと思うけど」

「通り過ぎたとか？」

「それはないんじゃない？ だって、あの木の所にある標識、コンビニ出てから見たの覚えてるし……」

女が指差して見せたのは、台風などでやられたのであろう、途中で折れてしまった大木の幹と、そこに設置された『スピード落せ』の標識。男の記憶にもあるそれは、二人が立ち寄った店の場所がこの辺りである事を教えている。

「もう、お店閉めちゃった……とか？」

女が、さもありそうな事を口にした。

町中でこそ「二十四時間営業」が定着しているが、夜間は閉めている店がない訳でもない。特に利用者の少ないこんな場所では、夜間店を開けているだけで電気代も馬鹿にならないだろう。

「まあ、そうかも知れんけど。でも、看板の電気とかも消すもんなのか？」

スピードを緩めて、ゆるゆると車を進める。

「あ、ね、あの柱って、コンビニの看板じゃない？」

女の示した方を見れば、山道には不似合いな柱が立っている。よく見かける、店舗の看板が乗った鉄柱のようだ。しかし看板はなく、

アクリル製のプレートが抜け落ちた枠組だけが、光を灯す事もなくしがみついている。

「いや、だって……。さっき来た時は、ちゃんと光ってたじゃないよ。違うだろ」

「でも、他に見てないよ、あんな柱」

よくよく確認すれば、鉄柱の側に建物らしき影がある。前のスペースは駐車場なのか。

ハザードを出して路肩に車を停め、男はドアを開けた。

「……ここだ」

周辺を見回して、呆然と呟く。それにつられて女も車を降り、恋人の近くへ行った。

だが、二人の前にあるのは。

古ぼけて錆の浮いた鉄柱と朽ちた鉄枠。以前には営業していたであろう、建物の残骸。

「なんで？」

「俺達、さっき寄ったよな？　ここで買い物したよな？」

昨日、今日、閉店したと言う感じじゃない。少なくとも数年は経っている。

「だってあたし、トイレ借りて。店員さんと話だって……」

「そうだよ。俺、店員に金払って、『心霊スポット』の場所聞いたじゃねえか。なのに何で、こんななってんだよ!？」

男も女も、目の前に突きつけられた現実にパニックを起こしていた。

残った外郭から、そこがかつてコンビニエンスストアとして営業していたらしい事は想像出来た。独特の平屋型の建物に、大きな嵌め殺しのガラス窓、店名の掲げられていたはずの枠組。すでにガラスは粉々に砕かれ、店内に放置された大量のゴミやガラクタと一緒に散乱している。

枠の中で光を放っていた電灯も今はなく、鉄の部品が時の重みに負けたかのようにねじ曲り、へし折れている。

どう考えても、先刻立ち寄った店とイメージが重ならない。それでも、ここだ。ここなのだ。

「どうして、どうしてなの!？」

「俺に聞くなよ! 俺に分かるはずないだろ! 俺の方が聞きたいぐらいだつ!」

ヒステリックに叫ばれた女の問いに、自身も怒鳴り返しながら男は両腕を振り回した。しんと静かな深夜の山中に、二人の声が響き渡る。

「ここで買ったんだよ! 何年も前の話じゃねえだろ。たった、三、四十分かそこの話じゃねえかよ! なんでこんななつてんだよ!？」 おかしいだろ? おかしいよ、なあ!？」

激昂した男は、乱暴な足取りで店に 店だった廃墟に 近付いて行く。恐らく中に入ってみるつもりなのだろう。

「やめて! もう、いいよ、帰りましょう? こんな所に、これ以上いたくないよ。何だか分かんないけど、分かんなくていい。何も知らなくていいから、ねえ!」

振り向けば、恐怖のためか興奮のためか、涙ながらに訴えている女がいる。足が震えているのだろう。上手く体の重心を支えられていないようだ。

そんな彼女の様子に、男の頭に昇っていた血がスウツと引いていくのを感じた。次に心を支配したのは、恐怖。

目の前にある事象の不自然さに、アドレナリンの放出が止まった脳がやっと気付いたのだ。

「あ、ああ、うん」

途端に、体中に震えがくる。背中を向けている廃墟から、得体の知れない「何か」が今も自分をじっと 窺うかがっているような、そんな気すらしてくる。

どちらからともなく走り出し、エンジンをかけっ放しにしておいた車のドアを開けた。

あたふたとシートに腰を下ろし、再度ドアに手を伸ばしかけた女

が、短く悲鳴をあげた。

「ヒッ！」

何事だと目をやれば、女は口元を片手で押さえ、もう一方の手でドアを指差している。否、ドアのドリンクホルダーに入れられた「モノ」を、だ。ソレを見て、男も言葉を失くす。

「っ！？」

ドリンクホルダーに入っているのは、目の前のコンビニで買い求めた紅茶のペットボトル。男が女に手渡し、車内で口をつけたソレは、中身を三分の一程残してホルダーに収まっている。どこかに放置されたまま、数年が経過した事を物語る有様で。

「あ、あたし、コレ、飲んだよね？」

「ああ……お、俺も飲んだ」

カラカラに乾いた口の中に貼り付いた舌を懸命に動かし、男が答えた。視線を移して運転席側のドリンクホルダーを見れば、自分で買ったはずの缶コーヒ―が収まっている。

「ぐうつ！」

思わず口を押さえる。

ホルダーに入っていたのは、パッケージ塗装も剥がれ、むき出しになった地に錆が浮き、飲み口などは腐食によって変色し朽ち果ててしまった……空缶の残骸だった。

「げええっ！」

堪え切れずに、胃の中の物を吐き出す。助手席側からも、女の吐いている声と音が聞えた。

あらかた腹の中にあつた物を出してしまうと、男は口元を拭って体を起こした。震える手を伸ばし、ホルダーの空缶をつかみ出す。その何とも言えぬブカブカした感触に、全身に鳥肌が立つ。気持ち悪さに耐え、手にした缶を投げ捨てた。

「そんな　そんな気持ち悪いモン、捨てちまえ！」

体を二つに折っ荒い息をついていた女は、男のその言葉にカクカクと首を振った。穢らわしいモノに触れるように恐る恐る手を伸ば

し、しかし最後の数センチを残して止まってしまった。

「早くしろっ！ 捨てんだよ！」

「でも だって」

「早くっ！！」

男の叫びに、女は目を閉じて大きく息を吸い込み、一気にペットボトルをホルダーから抜き取り、闇の中へ投げ捨てた。

「よしっ！ 行くからな！」

力を籠めてドアを閉めると、ライトを点ける。その光の中に浮か
び上がったのは。

「もう、お帰りですか？」

見覚えのある制服のジャケット。うつむき加減の青白い顔。生気
のない低い声。

あまりの事に、すでに声を出すことも出来ない二人の前に立つて
いるのは、コンビニで『心靈スポット』への道を教えたあの店員だ。
「ああ、せっかく教えて差し上げたのに、目的の場所まで行かれな
かったんですね？ 残念だなあ。あなた方なら、と思ったんですが」
うつむいた店員の口元が、不吉に歪む。いや違う。笑ったのか？
嘲笑ったのだ。

「なんだよ、コイツ。何、言っただよ？」

全身を走る震えが止まらない。気持ちの悪い汗が噴き出して来る。
「あなた方がね」

ヘッドライトの光の輪ギリギリの所に、何かがいる。その正体が
何であるかなど、知りたくもない。

「仲間になって下されば」

ギシッと車体が鳴った気がした。ペタペタと窓ガラスに触れる音
がする。

見てはいけない。頭ではそう分かっていても、確かめずにはいら
れない。見てしまえば、怖ろしい物があると確定してしまう。

だが見ずにいれば、それだけ己の中の恐怖が膨れ上がっていくの
だ。

「賑やかで楽しくなると、思ってたんですが」

「う……ああああ　　！！」

「いやああああ　　！！」

窓ガラスには灰色をした人間が張り付き、表情のない顔で二人をのぞき込んでいた。しかも、一人や二人ではない。窓と言う窓に、ビッシリと張り付いているのだ。

まるで骨格を抜き取り、ブヨブヨとした肉の塊がギュウギュウと押し付けられているように。

「お帰りになるなんて、本当に残念です」

これは生きている人間ではない。生きているはずが、ない。

男は、息をする事も忘れて大声を挙げたまま、無我夢中でアクセルを踏み込んだ。

猛スピードで遠去かる男女を乗せた車に向かって、店員は深々と頭を下げた。

「またのご利用をお待ちしております」

了

第二夜 金曜深夜のお客様

第二夜・金曜深夜のお客様

大学受験に失敗した俺は、人生の中で初めて挫折を知った。こう言っと、大概の人間は「何、大袈裟な事言ってくれちゃってんの」と呆れる。

まあ、確かに。俺だって他の人間から同じような事聞いたら、絶対にそう思うけどな。けど、俺にとっては大袈裟でも何でもない。本当の事だ。

子供の頃から俺は、大方の事は努力しなくてもこなすことが出来た。勉強も運動も、特に苦労した記憶はない。テスト前にも復習などした事はなく、それでも人並以上の成績を維持してきた。

俺にとって「出来る」という事は「当たり前」だった。

そんなもんで、大学受験に際しても、他人のように予備校に通ったり参考書を買って漁ったり、机にしがみついて受験勉強をしたりする事はなかった訳で。

だって、そうだろ？ これまで、そんなの必要なかったんだ。大学受験だからって、いつもの自分のスタイルを崩す事はなかった。その結果が　これだ。

友人達は「現役合格する方が珍しいんだよ」と、なぐさめにもならない言葉を口にした。だが、俺には分かってしまったんだ。そう言った友人が実は、腹の中で「ざまあみろ」と舌を出して嘲笑っているのが。

ああ、そうだよな。俺だって逆の立つ場だったら、きっとお前と同じように思っただろうよ。

浪人生活に入った俺を、両親も持て余したらしい。　いや、違うか。期待を見事に裏切った息子に対して、全ての興味をなくしたってトコか。

まあ、あんた達にとつちや「何でもソツなくこなす息子」が自慢だったんだろうしな。受験に失敗してウダウダと落ち込んでいる息子なんざ、道端の石コロ程度にしか感じないんだろうよ。

俺としても放っておいてもらった方が、気が楽だ。何のかんのと泣き言を聞かされるのも嫌だし、腫れ物に触るように顔色を窺われながら生活していくのも、堪らない。

親の興味はすでに妹に移っていたし、息苦しい空気の流れる家で暮らすのにも嫌気がさしていたから、思い切って俺は家を出る事に決めた。

どうせ大学に入ったら、一人暮らししようと思ってたからな。

両親は俺が家を出る事を、あっさり許してくれた。と言うよりも、俺が何をしようがどうでもいいらしい。

さして多くもない荷物をまとめ、俺は長年住んだ家を出た。特に何の感慨も湧かない。重い空気の流れる家から解放され、ようやく新鮮な酸素を深く吸い込んだ気分。強いて言うなら、そんなトコロか。

そんなこんなで、この町に引っ越して来てから三ヶ月程が経過していた。

最初の二ヶ月は何をする気もせず、思い出したように引っ越しの荷物を片付け、ただダラダラと過ごしていた。

新居に選んだ安アパートの外に出るのは、食事をする時と細々したモノを買い出しに行く時だけ。コリヤ、俗に言う「ひきこもり」ってヤツか？

まあ、そんな生活が長続きするはずもない。第一、生活するための金がない。

実家にいる時は親の金で暮らしていったからな。ひきこもって暮らすにも、先立つモノがなければ、いかんともしがたいと言うことか。

三ヶ月目に入ると手持ちの金も、そろそろ底を尽き始めた。さすがに、ヤバいか。

そう思っていた矢先、弁当を買うために良く利用するコンビニが夜間バイト募集の貼り紙を出しているのに気が付いた。

元々が夜型人間だから、夜中に起きているのは苦にならない。学生と違って昼間学校へ行く必要がないから、その間タップリと睡眠を摂る事が出来る。

うちからも歩いて通える場所だし、条件はバッチリだ。

早速、顔見知りになっていた店長に話をつけ、翌日の午後面接を受ける事になった。店で食事前の弁当と履歴書を購入して帰宅する。写真は確か、受験の時に撮影したバストショットがあるはずだ。翌日の午後二時、約束通りに面接に出向いた。店員に話をすると、店長が待っていると事務所に通される。

コンビニの事務所って、結構、狭いのな。それなりにスペースはあるんだろうけど、ファイルの納められた棚やら在庫やらで占められているので、見た目以上に狭く感じるのかも知れないな。

「失礼します。よろしくお願いします」

発注作業の途中だったのか、俺の方へ視線だけを動かした店長は「そこに座って、ちょっと待っていてくれ」と告げた。

物珍しさも手伝って、俺は事務所内をキョロキョロと見回しながら、店長の隣にある椅子に腰掛けた。

ふと目をやると、机の上には防犯カメラのモニターが置かれ店内の様子を映し出している。

へえー、こんな風に店内を見てる訳か。

レジカウンターで会計をしている親子連れや、雑誌コーナーでマンガを立ち読みしている職人風の若い男、タバコを購入するためだろうか、ズボンのポケットをゴソゴソと探りながら入って来たサラリーマン。

いつも見ている光景と大して変わらないのに、モニター越しになると、途端に現実味を失うものなんだな。

妙な事に関心していると、作業を終えたらしい店長が声を掛けて来た。

「いや、お待たせしました。済まないね」

「いえ、お忙しいのにお手数かけます」

カバンの中から履歴書を取り出し、店長に手渡す。

「夜に入ってくれてたバイトさんが急に辞めちゃってねえ。困ってたんだよ」

書類に目を通しながら、夜バイトの子って長続きしないんだよね、どうしてかなあ等と店長は呟いている。

「夜間のバイトって、そんなに大変なんですか？」

そんなに人の出入りが激しいって、どんだけ仕事があんだよ？

ちよつと不安になって、俺は店長に聞いてみた。

「基本的には、接客と商品の陳列だね。ただ昼間と違って一人だから、ちよつと大変かも知れないけど。それでも、他のコンビニに比べてキツイって事はないんじゃないかなあ」

夜中に何度か利用した事があるけど、店長が今言った以上の仕事があるとも思えない。

「じゃあ、木下君。慣れるまでの二週間は、夕方五時から十時のシフトに入ってもらおうかな。覚えてもらわなくちゃ、いけない事もあるからね。で、様子を見て夜中のシフトに移ってもらうから」

「はい、分かりました。よろしく願います」

顔知っているのに、改めてこつやって名前を知るのも、何だか変な気分だねえ。そう言って笑っている店長に頭を下げた。

シフト表は、翌日の昼までに作成しておくから、それ以降取りに来るように言われたので帰る事にする。

んな訳で、夕方五時から十時までの間、俺はコンビニでバイトするようになった。

これまでバイトなんてした事はなかったから、どうなることかと思っただけ、そこはそれ、俺ってば要領はいい人間だからね。

作業内容の引き継ぎとかレジの操作法とか、そんなモンに関しては全く心配していなかった。実際、一回説明を聞けば大まかなトコ

口は理解出来たしな。

俺は気にしていたのは、人付き合いの方だ。大概の事はそつなくこなす俺だか、と言う訳か、円滑な人間関係を構築するのは苦手だった。

俺は普通に接しているんだけどな。周りの人間にとっては、鼻持ちならないヤツだと映るらしい。

家を出て新居を決めるにあたり、これまでの俺を知る人間がいな事。それを第一条件にした。今更、俺の事を知っている連中の近くで暮らしたくない。

だから、このコンビニに買い物に来る客の中にも、バイトに入る人間の中にも、俺を知っているヤツはいない。

ここでの俺は「常連客から夜バイトに入った木下君」だ。今の俺にとって、それだけで充分だ。

学生時代特有の馴れ馴れしさはなく、適度に距離を置いた人間関係は、とても心地良い環境だった。

「木下君、そろそろ棚の方、見てもらってもいいかな？」

俺の指導係になったのは、去年からこのコンビニでバイトしていると云う笹村さん。俺より二つか三つ年上か？ 気さくで面倒見のいい人だ。

「はい」

店のカゴを手にして、俺は弁当コーナーの商品をチェックした。

この店では、夜の十一時に最終の納品が入る。陳列は夜中バイトの仕事だが、それまでに消費期限、賞味期限をチェックしておかなくてはいけない。

「木下君てさあ、この辺出身の人？」

棚を覗き込んでいる俺に向けて、レジで小銭の精算をしていた笹村さんが声をかける。

六時頃から九時前までは断続的に客が入るので、割と忙しい。だが九時半を回ったこの時間帯は、客足も落ち着きホッと一息つける。「いえ、三ヶ月前に越して来たんスよ」

「そつか。じゃあ、新市民さんだな」

そう言って、俺の方を見てニカツと笑う。色々、根掘り葉掘り聞かれるのかと思って身構えていた俺は、その表情にちよつと肩透かしを食らったような気がして、どんな顔をしていいのか困ってしまった。

「来週から夜中のシフトに移るんだって？」

「ええ。元々、夜中のバイトに募集かかってたんで。ですから、笹村さんと一緒にシフトって、今週一杯なんスよ」

弁当のコーナーから惣菜の棚に移動する。

「こないだ辞めちゃった小倉さんの交代要員か」

「何だか、急に辞めちゃったとかで、店長もずい分困ってたみたいスね」

「んー、まあね。小倉さんの気持ちも、分からないでもないけどなあ……」

笹村さんにしちゃあ、珍しく歯切れが悪い。

「店長と折り合い悪かったとか？」

「あー、そう言うのとは、ちよつと違うんだよねえ」

何だよ、気になるな。更に詳しく聞き出そうとした時、来客を告げるチャイムが鳴った。

「いらつしやいませー」

それに呼応するように、店の電話が鳴る。

結局その時は、笹村さんに話を聞けないまま終了の時間を迎えた。時計の針が十時を回ると、夜番に入るためにやって来た店長と交代する。俺のお試し期間が終わるまでは、店長が夜番に入っているらしい。

店内の床をモップ掛けしていた店長に挨拶して、仕事は終わり。ポケットの中の小銭を確認し、自販機で缶コーヒーを買う。商品を取り出そうと体を屈めた時、背後で自転車のブレーキ音がした。
「笹村さん、お疲れ様でした」

振り返ると、自転車にまたがった笹村さんが俺を見ていた。

「木下君さあ、出来るなら金曜日の夜のバイト、入らないようにした方がいいよ」

そう俺に言った笹村さんの表情は、とても冗談で言葉を返せる程軽くはなかった。

「金曜日……ですか？ 何でなんです？」

俺の質問は、もつともだろう？ だって具体的な話は、全然出て来ないんだぜ？

「金曜日の夜番……入るなって言っただけな。辞めた小倉さんって人の代わりなんだろうから、そう言う訳にもいかんだろうし」

遠くなっけ行く笹村さんの後ろ姿を見送りながら、俺は独りごちた。

「じゃあ、木下君。来週から夜番、頼むよ。これ、シフト表ね」

研修期間と告げられていた二週間目。俺は店長からシフト表を手渡された。

細かい文字がプリントされたコピー用紙に視線を落せば、「木下」と記された欄に付けられた印は、水曜、木曜、そして金曜。

「金曜……ですか？」

笹村さんから聞いた話が、脳裏に甦る。

「ん？ 金曜がどうかした？ と言う訳だね、ここのスタッフは皆、金曜に入るの嫌がるんだよ。やっと引き受けてくれた小倉さんも急に辞めちゃったし。本当に困ってるんだよねえ」

店長は銀フレームの眼鏡を指先で押し上げながら、木下君、何か知ってる？ などと声をかけてくる。

『金曜日の夜バイト、入らない方がいい』

笹村さんは、そう言っていた。

きつとこれまでも夜番に入ったバイトの人達から、店長に何かしらの相談があったんじゃないだろうか？ けどまあ、俺だって漠然とした情報しか持ってないしなあ。俺の方が教えて欲しいくらいだつて。

「いえ、別に何も知りませんよ。俺、越して来てから、まだ日も浅いですし」

「そっかあ。そうだよな。それじゃあ、よろしく」

着替えて店に出ると、先にシフトを知らされたバイトの女性が俺を見ていた。まあ、何とも形容しがたい表情で。

「木下君、金曜入るんだ？」

小声でかけられた言葉に、俺も思わず小声で返してしまう。

「そうみたいっすね。そもそも、小倉さんの代わりなんで、当たり前っちゃ当たり前なんすけどな」

立ち話をしている訳にもいかない。俺は床にモップを掛けながら、彼女は棚を整理しながら会話を交わす。

「木下君、これ……」

制服のポケットから小さなお守り袋を取り出して、俺の方に差し出してくれた。

「本当はね、小倉さんにあげようと思ってたんだけど。渡す機会がないまんま、辞めちゃったから。代わりにもらってくれる？」

お守り？ 何でんな物が必要なんだ？ ツツコミたい部分は太いにあるが、せつかくの好意を無にして人間関係を崩したくはない。

朱い小さな袋に入れられたお守りを、俺はジーンズのポケットに仕舞った。

その日は十時の上がり時間が来るまで、色々と考えた。

金曜日の夜間バイトを、皆が気にするのは何故なんだ？ 店長はその噂の実態を知らないようだけど、従業員達の間では暗黙の了解と言っか、共通の「禁忌」として浸透しているらしい。

しかも「お守り」なんてアイテムまで飛び出してきた。何だっただ、一体？

あの笹村さんの意味深な発言。お守りをくれた女性の顔。この店に何があるってんだ？

まあ、いずれにせよ、金曜の夜になれば分かる事だ。皆が気にする「金曜日」になれば。変な話だけど、俺の中には「金曜日の夜」

を楽しみにしている気持ちさえ、あった。

水曜の夜、木曜の夜。何事もなく、俺はバイトをこなす。自分の都合で夜更かしするのではなく、決められた時間、決められた作業を行わなくてはいけないと言うのは、思いの外、体力的にくるものだった。

まだまだ緊張しているのもあるのかと感じたが、「緊張」という二文字こそ、自分には最も縁遠いモノだったと思い出して苦笑する。そんなら単純に、一人でやる作業量が増えたり、これまでの生活スタイルが変わったりした事から来る疲れなんだな。

朝六時。早番バイトの店員と交代すると、眠気が満タンになった体を引きずりアパートへ戻る。こりゃ、自転車でも買つか？ けど店まで五分程度の場所だしなあ。

ボンヤリとそんな事を考えているうちに、自宅である安アパートの敷地に入る。上着のポケットを探り、取り出した鍵で玄関を開ける。出かける時に閉めたままにしておいたカーテンのために、差し込む光はわずかで、部屋の中は薄暗い。

滅多に陽に当てる事もないため、冷たく固い布団にもぐり込み、食事もそこに夢の中へダイブする。まあ実際には、夢も見ない程なんだが。

バイトを始めてから、自分ではこれまで感じた事がないくらい、生活が充実していた。

大概の事は苦勞しなくても出来てしまう。それは裏を返せば、自分のやる事に達成感も充実感も得る事はないって話になる。

本人にとっても周囲にとっても、出来るのが当たり前。だから俺には、「何かに向かって努力する」なんて事はなかったし、努力してまで為したい「何か」に出会った事もなかった。

今だって、その「何か」を見つけた訳じゃなかったけど、それでも「自分の手で稼いだ金で生活する」ってのは俺にとって、新鮮で満足出来るものであるのは事実だ。 とは言え、いくら安アパー

トであつても、週三日のコンビニバイトで全てをまかなえるはずもない。

とりあえず現状はしのげるかも知れないが、先々の事も考えないといけねえんだろつな。

目覚まし代りの携帯が、枕元でうるさく自己主張している。音のしている辺りを手探りすると、指先に堅い感触。まだほとんど機能していない頭のまま、アラームを止めて時刻を確認する。

大きなあくびをして、ボサボサになっている髪に手を突っ込んで頭をかくと、ノソノソと布団から這い出した。

結局、メシも食わずに寝こけてたんだな。とりあえず、熱いシャワーでも浴びて頭をスッキリさせよう。

狭い風呂場で熱い湯を頭から浴びると、幾分か意識がハッキリする。

今夜だよな、問題の「金曜日の夜」ってのはさ。一体、何が起きるってんだろつなあ？

手早く着替えて、脱ぎ散らした服を洗濯機に放り込もうとした時、ジーンズから何かが落ちた。足元のソレを拾い上げて見れば、数日前にもらったお守りだった。

『小倉さんにあげようと思ってたんだけど』

これをくれたバイトの女性は、そう言っていた。て事は、お守りが必要になるようなイベントが発生するって訳だ。

手にしたソレを、シャツの胸ポケットに仕舞ったのは、何か深い考えがあつての事じゃない。なんとなく　そう、なんとなく、だ。残り物で食事を済ませると、上着を羽織って部屋を出る。五分も歩けば……もう店だ。

「おはようございます」

二台あるレジのうちの片方でレジ締めをしていた笹村さんに、まずは声をかける。

数えていた小銭の山から顔を挙げ、笹村さんは俺の姿を認めて返

事をしてくれた。

「ああ、おはようございます」

この『おはようございます』程、俺を戸惑わせるモノはなかった。
「朝の挨拶は『おはようございます』」

挨拶の何たるかを学ぶ時、まず、そう教わるだろ？ いくら、その日のうちで一番最初に顔を合わせるからって、夜の十時に出てくる挨拶が「おはようございます」って。

誰かに聞いた話だからウロ覚えだが、とある業界のどっかの社長が言い出したらしいよな。朝昼晩の挨拶の中で、「ございます」と丁寧語で表されるのは「おはようございます」だけだから。なんだそうだ。

んー。まあ、一応納得……かな？ 違和感がなくなる訳じゃないけど。

コンビニの制服に着替え、ゴミ袋を手到店の表を掃除しながら、つらつらとそんな事を考える。こんな、どうでもいいような事を大真面目に考えるなんて。どうやら俺は、自分で自覚している以上に「金曜日の夜バイト」を気にしているらしい。

ゴミをまとめて所定の場所に置いて、店内に戻る。笹村さんとレジを交代し、接客をする。何も変わらない、いつものバイトの風景。金曜日だからと言って、客の入りに差がある訳じゃない。

いや、あるか。翌日から休みになる学生が、雑誌コーナーで立ち読みをしたりする数は多いし、これから出掛けるのであろう着飾った女性客も多い。

あつという間に、納品の時間がやってくる。これだって、いつもより多い。レジが落ち着いた時間を見計らって、商品を棚へ並べていく。

気が付けば、すでに日付けは変わっていた。何だ、別におかしな事なんてないじゃんかよ。あんなに意気込んで、馬鹿みてー。

店内にはチラホラと客の姿が見える。レジ奥の煙草を補充し、空になった段ボールをたたんで外に出す。

時計の針が午前一時半を回る頃には、三人程あつた客の姿もなく
なり、静かな店内にはスピーカーから流れる音楽だけが響いている。
うしつ。今のうちに少し休憩しとくか。店内を見回し、客の姿が
ない事を再度確かめる。

一人しかいないから、トイレに行くのにも気を使う。さすがに、
客がいる時にトイレに行くのは、はばかれるよなあ。

ゆつくりとトイレに入って用を足し、さっぱりした気分で店内に
戻ると同時に、来客を告げるチャイムが鳴り響いた。

「いらつしゃいま……せ……」

反射的に声をかけて入口の方へ顔を向けるが、自動ドアが開いた
気配はない。もちろん、人の姿もない。

「何だ？ センサーの誤作動か？」

ごくまれに、自動ドアの外の人影などに反応する事があると聞いた
記憶がある。きつと、それだろう。気にしない、気にしない。

気持ち切り替えようとすれば、今度は菓子コーナーの袋入スナ
ックが音を立てて棚から落ちた。積み方がマズかったのかと見てみ
れば、ソレは一番上の棚ではなく、二段目の棚から落ちていた。

何かの弾みで落ちるような場所ではない。現に、他の商品はきち
んと所定の位置に収まっている。どう考えたって、自然に落ちるよ
うなモノではない。

手にした袋を棚に戻す。と同時に、今度は雑誌コーナーで音がす
る。目をやれば、平積みになされていたはずのマンガ雑誌が崩れ、床
に散らばっている。まるで誰かが、わざとそうしたように。

こんな事が起こるはずがないんだ。なぜなら、崩れた雑誌の山は
通路手前側に積んであつた山ではなく、その奥にあつた山なんだか
ら。

何だ？ 何が起こってるんだ？

散乱している数冊のマンガ雑誌を直していると、再び来客を告げ
るチャイムが鳴る。心臓に悪い程の音量で響くその音に、ビクツと
しながら顔を挙げる。

もちろんそこには 誰もいなかった。自動ドアも閉じたまま。俺は全身に鳥肌が立つのを感じた。

これだ。これが「金曜の夜にはバイトに入らない方がいい」と言われる原因なんだ。そう気づいた途端、店内の温度がグンと下がったような気がした。足元から気持ちの悪い震えが上がってくる。呆然と立ち尽くしている俺の耳に、店内を歩き回る足音が忍び込んできた。せかせかとした足音ではない。ひどくゆっくりとした……そう、足を引きずるようにして歩く音。

今、レジの前にいる。ソレは耳障りな音を立てながら移動している。

あの棚の角を曲がれば、俺まで一直線だ。そう思った瞬間、三度、対人センサーがチャイムを発した。ハッと我に返る。

いる。あそこに、いるんだ。

意識が脳に命令する前に、体の方が先に動いた。

拾い上げたまま持っていた雑誌を放り出し、事務所へ駆け込んだ。もしかしたら、何事が叫んでいたかも知れない。

積み上げられた在庫の段ボールに背中を預け、俺は荒い息をついた。

今のは何だ？ 一体、何がどうなっているんだ？ 誰が店の中を歩き回っているんだ？

バクバクと暴れている心臓と呼吸を落ち着かせようと試みる。

客は誰もいなかった。それは確かだ。大きな店舗ではない。たかだか、コンビニの店内だ。人がいれば、目に付くはずだ。

もしかして、棚の間、通路に隠れていたのか？ しゃがみ込んでいたとすれば……そして、身を屈めたまま移動していたとすれば、それなら、俺の視界に入らないと言う事も、可能かも知れない。

何のためにそんな事をするのかは知らないが、絶対にあり得ないとは言い切れない。いたずらして、俺を驚かそうとしたのかも。

そう考え付くと、今度は腹の底から怒りが湧き上がってきた。隠れていた誰かは、慌てふためく俺の姿を見て笑っていたに違い

ない。さぞかし、面白い見せ物だったろうよ！

俺の視界の端に、店内の様子を映し続けているモニターが入った。そうだ、これなら。

あれから対人センサーの音はしていない。だとしたら、俺をハメようとした誰かはまだ、店の中にいるって事だ。

くそっ！　どこのどいつだ？　面、見てやる！

無機質なスチール机の上に置かれた、平面な箱。淡々と店内の様子を映し出しているその画面に、俺は張り付いた。

レジ前、雑誌コーナー、ドリンクコーナーと視線を移す。

どこだ？　どこにいる？　どこに隠れた？

ふと違和感を覚えて、目を凝らす。アイスのケースの陰だ。見てみると、何かが動いているような気がする。

そこか。そこに隠れているのか。

事務所から飛び出そうとした俺の目の前で、アイスケースの陰にいた何モノかが大きく動いた。

よし、顔を見てやる。出て来い！

モニターの前で、俺は両手を握り締めて待った。

もぞり……

と、ソレが動く。

ずぞり……

と、モニター越しでも音が聞こえてきそうな動きで、ケースの陰から姿を現した。

「う……あ……」

思わず、声がもれる。

店の通路を這いずっているアレは……。

女、だ。年は俺と大して変らないだろう。四つん這いになって、

ズルズルと体を引きずっている。

長い髪はざんばらで、影になった表情までは読み取れない。所々破れた服は、土にまみれ、血液らしき染みで汚れている。その先からのぞく両足、あり得ない角度に折れ曲がり、どす黒く変色している。

あの状態では立ち上がる事はおろか、わずかな重みですらかけられはしないだろう。

乱れた前髪で隠された目は、どこを、何を見ているのか分からない。

アレが……アレが、さっきの音と気配の正体。

だめだ。頭のどこかで警報が鳴り響いている。このまま、アレを見ているのは、良くない。

俺の体から切り離されてしまったかのように、必死に警告を発している意識。だがそれに反して、身体は縫い止められているように動かす事が出来ずにいた。

モニターから目を逸らす事が出来ない。息をひそめて、画面に入る。

床の上を這い回っていたモノが、ふと動きを停めた。何かに気付いたように顔を挙げる。店内に設置された四つのカメラ。長い前髪の奥にある目は、そのうちの一つを見ている。

こちらからその表情をうかがう知る事は出来ないが、アレの目は間違いなく、このカメラを捉えている。俺が見ている、このカメラを。

ずぞっ……

と女が動いた。先程までの緩慢な動きではない。明らかに目指す何かを発見したモノの動きだ。

ぞぞぞぞ……

両足が使えないとは思えない速さで床の上を進み、カメラのフレームから消えた。

どこだ？ どこに行った？ また、棚の陰にでも隠れたのか？

慌てて画面のあちこちに視線をさまよわせていると、突然モニターにノイズが走った。

「おい、何だよ？」

モニターの乱れに、思わず声をあげ、壊れたテレビにするように両手でバンバンと叩く。

見たい訳ではない。目にしても不快になるだけだ。でも、見えなければ見えないで、ひどく不安になる。

乱れた画像に忙しなく視線をやりながら、モニターを叩き続けていると、始まった時と同じようにいきなり画面が戻った。

「あ　直った……」

ホツと息を吐く。そして気付く。

違う。さっきまで見ていた映像とは違う。通常なら、店内四つのカメラで撮影している映像を、四分割された画面で映し出している。だが今、映し出されているのは　。アイスのケースから続く通路と商品棚。先程まで、あの女が映っていた画面。その画面だけが、モニターに大映しになっている。

何が起こっている？　分からない事が多過ぎる。分からない事だらけだ。

どうする事も出来ず、ただ呆然とモニターを見ているしかない俺の目に、動くものが入ってきた。

画面の下から、細長い何かがせり上がってきている。粒子の粗い防犯カメラの画像の中でも、ソレの病的な白さは見て取れた。

血の気の全くない、青白い、まるで死人のような　指。何本かは、あらぬ方向へねじ曲がっているその指が、ゆっくりとモニター画面を這い上がって来る。それに続いて盛り上ってくる、黒い髪。

『……………ネエ……………』

耳の奥に、粘り付くような声が響いた。思わず耳を押さえて辺りを見回す。だが、部屋の中には俺しかない。

『ネエ……聞コエテルデシヨ?』

聞き間違いじゃない。鼓膜の直前で発生したんじゃないかと思わせる、空気を震わせない声。耳から入り込んで脳内をかき回し、背骨に沿って冷たい空気が流れていくような、嫌な声。

治まっていたはずの鳥肌が、再び全身に広がっていくのが分かる。室内の温度が、グンツ、と下がった気がした。

『ネエ……アナタ……』

抑揚のない、不気味な声がまた聞こえる。と同時に、画面上に又ツと頭が現れた。

油気の抜けたバサバサの前髪の間から、表情のない眼がこちらを見ている。

「っ!？」

血走った白目、灰色に濁った瞳。キロキロと動くソレが、息を飲んで立ちつくす俺を捉えた。ヤバイと思ったが、もう遅い。

『イイイイタアアアアア』

にたあ、と笑った目が三日月のように細くなる。俺と女の視線がガツチリと絡み合う。

『アナタ、アタシト、オンナジ……』

カメラのレンズを引っかいているのだろうか、爪を立てて女の指先が動く。

『アタシト、オンナジヨウ』

何が 何が同じだと言うんだ?

女の視線の呪縛から逃れられないまま、俺は頭の隅でわずかに考えた。少しでも気を抜くと、そのまま意識を持っていかれそうだとにかく、思考するんだ。脳裏に浮かぶ事柄に必死にしがみ付く。

『ドウシテ? ドウシテ、アタシヲ受け入レテクレナイノ? アタシトアナタハ、オンナジナノニ』

女の顔に嗤い以外の強い感情が表れた。苛立ちだ。

知った事か！ 俺には、こんな奴と同列に扱われる心当たりなんか、ねえぞ！

モニターの中から俺を睨み付けていた女の手が動く。カメラに顔を近付けたのか、画面一杯に女の濁った両目が映し出された。

『アタシトオンナジクセニ。ドウシテ、アナタハ生キテルノ？ オカシイワ。ソナノ、ズルイ。アタシトオンナジクセニ』

先程と同じ事を繰り返しながら、女の目が近付いて来る。と、再び画面にノイズが走った。だがその乱れはすぐに治まり、女の輪郭がより鮮明に、より立体的になった。

「つつ！？」

モニターの置かれた机から離れようとした弾みで、椅子のキャスター部分に足を引っ掛け、無様に転んでしまう。深夜の事務所に騒々しい音が響き渡った。

顔が……女の頭部が、狭いモニターの枠から出てこようとしている。

ラップが薄いビニールの膜に顔を押し付け、無理矢理引き伸ばせば、丁度こんな感じになるだろうか。

わずかな隙間にねじ込んだ女の右手が、画面を突き抜けて俺の方へ伸ばされる。いびつに歪んだ指が、空を掴もうと蠢く。部屋の中一杯に、強烈な異臭が充満した。

「ぐつつ……」

鉄錆じみた臭い、肉の腐った臭い、すえた汗の臭い、時間の経過した衣服の臭い。それらが混じり合い、濃縮されたみたいな、堪らなく不快な臭気。

モニターから抜け出そうとする女が動くたびに、臭いが強くなる気がした。あまりの臭気に胃液が逆流する。鼻と口を手で押さえ、もつれる足を支配しようと懸命になるが、まるで脳からの指令を拒否する如く、思い通りには動かない。

ただやみくもに、床や椅子、机の足を蹴るばかりだ。

すでに女の頭部はモニターから完全に抜け出し、肩の辺りまで現れていた。自由になった首を巡らし、床の上でジタバタしている俺を見下ろす。

『ドウシテ、アナタハ生キテルノ？ アタシトオンナジナノニ。ズルイワ、ズルイ』

女が口を開くと、異臭は耐え難いものになる。膜がかかったように白濁した目が、俺を捉えて離さない。

「う……あ……あああああっ！！」

女の肩が、ぐぬりつ、とモニターから抜け出たと思うと、あり得ない長さに上半身が伸びた。ねじれた指が俺の方へ向かって来るのを見て、麻痺していた喉から、ようやく声を出す事が可能になった。『ネエ、アナタモ逝キマシヨウ。アタシト同ジ所へ。生キテイタツテ、仕方ナイデシヨウ？ イイ事ナンテ、何モナイジャナイ』

腰から下は、まだモニターを抜けてはいない。だが女の体は、柔らかいゴムが何かで出来ているみたいに、床の上にいる俺の方へ伸びてくる。

「く、来るな！ 来るなあ！！」

言う事を利かない両足を拳で叩き、叱りつけながら動かし、どうにかして女から逃げようと試みる。

『ドウシテ逃ゲルノ？ ドウシテ生キテルノ？ アタシト同ジクセニ！ アナタダケ、ズルイジャナイ！』

俺を見ている女の目が吊り上がった。鉤爪の形に曲げられた両手が、体でも衣服でも、捕えられるモノを求めている。

『アタシト同ジクセニ生キテルナンテ、ズルイ！ ズルイズルイズルイズルイズルイイイイイイイイ ツー！！』

「うあああああ つ！！」

足を動かした拍子に、ズボンの裾が女の手が届く範囲に入ってしまった。そのチャンスを相手が見逃してくれるはずもなく、想像以上の素早さで、俺のズボンの布地を掴んだ。

数本の指があらぬ方を向いているとは思えない程に強い力で、ガツチリと布地を掴んで離さない。

「離せよ！ 離せ！ 触るな！ 離せよ！ 離せよ！ 離せよ！」

壊れたCDのように同じ言葉を繰り返しながら、女の手を蹴りつけた。だが、そんなものではビクともしない。ジーンズの生地を伝って、上半身へにじり寄ってくる。

『ズルイズルイズルイズルイ 』

女の顔に浮かぶのは、嫉妬と羨望、そして憎悪。渦巻く負の感情が、掴まれた箇所から俺の内側へ流れ込んで来るような気がした。

「う……うあ……ああ……」

体の芯が冷たくなって、痺れてくる。頭がジンとして、何も考えられなくなっていく。全身から力が抜け、ただうめく事しか出来ない。

そんな俺を、悪意滴る目で見据えながら嗤う女はヘソの辺りに手をかけた。体に流れ込んで来る冷気が、一気に勢いを増した。意識が白く霞んでいく。

俺は 堪らず、意識を手放した。

「……君。 木下君！ おい、大丈夫か？ 木下君！」

体を揺さぶられ、大声で自分を呼ぶ声で気が付いた。薄く目を開けば、怖いぐらいに真剣な顔でこちらを見ている笹村さんが。

「う……あ……さ、笹村さん……」

頭を振って起き上がろうとする俺を、彼が支えてくれる。

「そうだ！ 笹村さん、女は！？ ここに女がつー！」

あの異様な光景を思い出し、俺はパニックになりかけながら周囲を狂ったように見回す。支えてくれる腕を払いのけ、暴れ出しそうになる俺を逆にガツチリと捕まえ、笹村さんはなだめてくれる。

「大丈夫だ。誰もいない。しっかりしろ、大丈夫だから」

「誰も？ 誰もいなかったんですか？」

その言葉に必死になってすがろうとする俺を、笹村さんはしっかりと見据えて言ってくれた。

「金曜の夜番だったし、気になって来てみたんだ。店の方には誰もいないし、おかしいと思って事務所をのぞいてみたら、ここで君が倒れてた。他には誰もいなかった。それは本当だ」

笹村さんの言葉に、ようやく体の震えが止まる。

「助かった……」

助かった。助かったんだ。

大きく安堵の息を吐く。

その後は朝まで、笹村さんが付き合ってくれた。店の周囲が白んで来て、朝番のバイトと交代するまで、何事もなく過ぎた。

余程ひどい顔をしてたんだろうか？ 朝番に出て来た店員が、チラチラと俺の方を見ていたが結局何も言っただけだった。まあ俺も話をしたい心境じゃなかったし。

身体の芯に残る重い疲れを引きずったまま、ロッカーで着替えて制服を放り込む。

事務所を抜ける時、スチール机の上のモニターが嫌でも目に入り、俺は軽く身震いした。

「お疲れ様でした」

出来るだけ視線を合わさないようにして、コンビニの店内から外へ足を向けた。

「木下君」

外には自転車を押した笹村さんが待っていて、俺の姿を認めて声をかけてくれる。

「少し話して行こう。このまま帰っても、眠れないだろうし」

心配そうな顔で言われてありがたかったし、とても申し訳なかったが、とてもそんな気にはなれない。頭の中がグチャグチャで、まともな話が出来るとも思えなかったし。

「すいません。今日は帰ります」

笹村さんは俺の言葉を聞くと、そうか、と言って少し心配そうに笑ってくれた。

「何かあったら、いつでも相談にのるからさ。気にしないで連絡く

れよ」

人付き合いは苦手な俺だけど、笹村さんの気遣いは本当に嬉しかった。それじゃあ、と手を挙げて去って行く彼の後ろ姿に、軽く頭を下げた。

疲れ切った体を無理矢理動かして、自分のアパートへ辿り着く。後ろ手でドアに鍵をかけ、部屋の中へ文字通り転がり込んだ。

室内の薄暗さにふと気付き、ブルツと身震いして急いでカーテンを開ける。晴天を約束するような陽光が窓から差し、俺はホッと息を吐いた。

昨夜から何も食べていないせいか、胃は空腹を訴えるが……食欲は湧かない。冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し一口飲むと、少しだけ気が紛れた。

「しかし アレは一体……」

落ち着いたせいで、夜中の出来事を思い起こしてしまう。

「ダメだ、ダメだ!」

頭を振って嫌な記憶を振り払い、両手で頬を叩く。

「シャワーでも浴びるか」

俺は誰にともなく呟くと、狭い脱衣所へ足を向けた。

風呂場のシャワーコックをひねり、湯が熱くなるまでの間に服を脱ぐ。

「何だ、コレ?」

シャツを脱いだへソのあたりに、見覚えのない赤いアザを発見して手を止めた。こんな所にアザなんて、あったか? いや、夕べまでは、確かにこんなモンなんてなかった。

そこまで考えて、俺はハタと思い当たった。もしかして
。フアスナーを下すのももどかしく、ジーンズを脱いだ。

「うわあああああつ!!」

俺は自分の足を見て、その場にへたり込んだ。
足首からへソの周辺、丁度、あの女が掴んだ部分に残っていたの

だ。赤黒い手形が。

ジリジリと近づいてくる、忌まわしい光景を思い出させるいくつもの手形。

無意識に床の上をまさぐった手が、脱ぎ捨ててあったシャツに触れる。その指先に、シャツの布地とは異なる感触があった。

固まってしまった筋肉をどうにか動かし、自分の指先にあるモノを確かめる。

シャツの胸ポケットからのぞく、白いヒモ。そっとソレを引き出すと、朱いお守り袋が見えた。金曜のバイトに入る事が決まった時、同僚の店員にもらったモノだ。

急にあの女が姿を消したのを不思議に思ってたけど、このお守りのお陰だったんだろうか？　これがなければ、こんな手形だけじゃ済まなかったのかも知れない。

そう思った瞬間、胸ポケットからお守り袋が完全に抜けた。

「っ！？」

コトンッ

小さな音を立てて床に落ちたソレを目にして、俺は完全に言葉を失った。

鮮やかな朱色をした袋は、真ん中から引き裂かれたように破れ、内に納められていたであろう木製の札が……真っ二つに割れて転がっている。

目の前に突き付けられた現実に為す術もなく、ただ呆然と座り続けるしかない俺の後ろで、無人の風呂場に降りしきるシャワーの音だけが響いていた。

『アタシト、オンナジクセニ』

あの女の言葉の意味を知ったのは、手形のアザが薄くなった頃だった。

両親の期待を一身に背負った女子高生が、希望していた大学の受験を失敗したのだという。

それを両親から激しく詰られた彼女は、衝動的に店の入っている
マンションの屋上から飛び降りたらしい。

彼女には、分かったんだろうか？

だからこそその「同じ」という言葉だったのか？

もしも、俺が。

もしも……もしも俺の神経がもう少し細かったら。

そうしたら、彼女と同じ道を辿っていたかもしれない。

『ドウシテ、アナタハ生キテルノ？』

そう言いたい気持ちも分からないでもない。

だからと言って、俺は俺でしかない訳なんだが。

あの日以来、店長に何と言われようと「金曜の夜バイト」を断固
として断り続けている。

了

第三夜 非正規雇用社員

第三夜・非正規雇用社員

うちのコンビニには、店員の誰もが知っている「非正規雇用社員」がいる。

と言っても、不正に雇用している訳じゃないから安心して欲しい。もちろん「非正規」であるから、給料なんかは払っていない。まあ、うちとしては大いに助かっているんだし、給料を払うぐらい何て事はないんだが。でも金をもらっても、使い道はないかもなあ。

多くのスーパーやデパートが抱えている悩みを、同じくコンビニも共有している。

『万引き』

スリルを感じるゲームだと思っているヤツや、数百円を惜しむヤツ、本気で生活に困っているならまだしも、金をちゃんと持っているのに支払わないんだから嫌になる。

『万引き』なんて言うから、軽い気持ちでやるんだ。覚えとけよ、『万引き』はれっきとした『窃盗』で犯罪なんだからな。それで潰れる店だってある。ホント、堪ったモンじゃねーよ。

しかも最近では、店の備品まで盗んで行くヤツがいる。トイレットペーパーとか、ゴツソリだぞ。信じられるか？

けど、どんな時に大いに力を発揮してくれるのが、うちの店の「非正規雇用社員」なんだ。

警備員？ いや、そんなんじゃないよ。ん？ 違う、違う。

うちにいる「非正規雇用社員」はな、生きてる人間じゃないんだ。『幽霊』だよ。は？ ふざけてるのかって？ うーん、そう思うのも無理はないよなあ。自分だって、最初はそうだったし。

まあ、そんな力一杯不信そうな顔しないでさ、ちよいと俺の話に

付き合つてよ。

俺がこのコンビニに店長としてやって来たのは、二年ちよつと前ぐらい。

引き継ぎの時に、前任の店長が俺にそつと耳打ちしてきたんだ。

「驚くといけないから、先に言つておくよ。ここの店はね、『出る』から」

「は？ 何がですか？」

「だから……コレ、がね」

前任者はそう言つて、両手を胸の前でダラリと垂らして見せた。

「ちよつと、やめて下さいよ。俺、そついつの苦手なんですから」

眉間にシワを刻んだ俺に、彼はいたずらっぽく笑う。

「大丈夫だよ。店の人間に悪さしたりはしないから。お金くすねたりするような、不心得者でない限りね」

いや、からかわれているのかと思つたよ、一瞬。第一、『出る』

コンビニつて何なんだよつて感じじゃないか？

でも、店に出るようになって、その言葉の意味が良く分かつた。

確かにこの店には、いるんだよ。誰も採用した覚えのない店員がいや、もしかしたら、店で働く誰よりも長くココにいるのかも知れないな。

怖くないのかつて？ 全然。

だつて、店には実害がないからさ。それどころか、皆が感謝してるんだ。

うちの店はさ、高校や大学の近くにあつて、学生の利用客が多い。だからつて訳でもないんだが、軽い気持ちで万引きをする奴が多い。化粧品、雑誌、菓子、ジュース等々。盗まれれば、その分の売り上げは入らない。だからマイナス分は店の持ち出しとなる。穴埋めするには、倍の数量を価格を上乘せした状態で売らなきゃならない。

この御時世、純利益さえまならないのに、商品値上げして、客足が遠退いて、そんでもって万引きも減らないってんじゃ、どうにもやり切れないだろう？

以前はうちの店も、かなりの万引き被害に悩まされていたらしい。特に酷かったのが、化粧品。モノが小さいから、見つけづらいんだこれが。しかも、店のトイレ使ってメイクして行く奴までいる始末。ホントになあ、自分のやってる事が世間一般で言う「犯罪」だって、理解してくれよ。

んで、俺がソレに遭遇したのは、店長になってから二週間程してからだった。

昼過ぎから四時頃までは、昼食を求めるドライバーや菓子を買い与えるために子供を連れて来る近所の主婦、学校が終わった学生達がやって来て賑やかだ。

レジの混み具合を気にしつつ、商品の発注作業を行っていた俺の耳に届いたのは、この場にそぐわない男の悲鳴。

「うわあああああ　っー！」

駆けつけてみると、トイレの鏡の前で腰を抜き、アワアワとうめいている高校生の男子。

俺は事態が飲み込めず、とりあえず、目の前の高校生をなだめることにした。

「大丈夫ですか？　落ち着いて下さい。一体、どう」

したんですか？　と尋ねようとした時、彼のズボンのポケットから何かが落ちた。腰を屈めて手に取ってみれば、それは携帯音楽プレイヤーに使用するヘッドホン。購入した事を示すテープも貼られておらず、むき出しのままだ。

おいおい、もしかして万引きかよ？

俺が口を開こうとした瞬間、タイミングを計ったように店員の一人が声をかけて来た。

「床が濡れていたので、滑ってしまわれたようですね。お怪我があ

るといけませんので、事務所の方へどうぞ」

慣れている。これまで何度も、こんな場面を見ているのだからか？

店員は高校生を立たせると、床の上に落ちていた商品をさりげなく拾い上げた。

「店長、こちらをお願いします。後で、事務所の方へ」

小さい声で俺に告げ、店員が高校生を事務所へと案内して行った。「申し訳ございません。トイレの床が濡れていたようです。お騒がせ致しました」

こちらを見ている数人の客に向かって頭を下げると、掃除ロツカ―からモップを取り出す。……だが、トイレの床に滑る程の水は見当たらない。手を洗った時に跳ねたと思われる水滴が、若干痕を残しているだけだ。

ん？ どう言う事だ？

こんな所で首を傾げていても、しょうがない。俺は手にしていたモップで洗面台の下を拭き、トイレのドアを開けた。

雑誌コーナーの前に立っていた中年の男性客と、目が合った。トイレを待ってたのか？

「お待たせしました」

そう言っただけで頭を下げると、彼は、いやいやと手を振った。

「そっか、店長さんは来たばかりなんだ。驚いたでしょ？」

「はあ、そりゃ、まあ」

いや、ホント、マジで、何が何だか。

「ここの店はさ、あるんだよ、ああ言うの。店長さんも早く慣れた方がいいよ。常連のお客さんとかは事情を知ってるから、今さら驚かないしね」

「ええっと お客さん？ 一体、何の話を？」

全く理解出来ない。話について行けない。

「前の店長さんから、何も聞いてないのかい？」

……そう言えば、何か聞いたような気がするが……。

「まあ、事務所へ行って話を聞けば分かるさ。あの高校生と店員さんが待ってるんだらう？」

そう言えば、そうだった。

事務所に顔を出してみると、高校生は店員と向かい合わせで座っている。落ち着いているように見えるが、青い顔をして、時折肩を震わせていた。

「店長」

俺を認めた店員が声をかけてくる。

「あーっと、君、名前は？」

スチール椅子を引き寄せ腰を下す俺に、高校生はうつむいたまま、上目使いに視線をくれた。その目の中には確かに、何者かに対する怯えが浮かんでいる。

幾度か口を開くのだが、うまく声が出ないような素振りで結局口をつぐんでしまう。唾を飲み込むためだらうか、数回喉が上下し、彼はようやく声を発した。この年頃の少年のものとは思えない程、か細く、弱弱しい声を。

制服を見れば、どの学校かは分かる。うちの店から一番近い高校のものだ。

言葉を発した事で、少しは気が楽になったのだろうか？ 舌で唇を湿らせると、俺に向かって口を開いた。

「あの　本当に、済みません。出来心だったんです。お金は払いますから」

ちよつとでも言葉が途切れれば、自分の中でふるい起こした勇気が萎えてしまうとも思ったのか、一気にしゃべる。

万引きの罪から逃げようってのか？ それにしちゃあ、必死さが尋常じゃない。目が血走って、口から唾を飛ばしそうな勢いだ。

一体、トイレの中で何があったってんだよ？ 全く、分からない。「済みません、済みません、初めてだったんです。これまで、こんな事したことなかったんです。本当です、信じて下さい」

聞けば、自分が使っている物よりも機能の良さそうなヘッドホン

が目に入り、つい魔が差してしまったんだそうだ。

「出来心」や「魔が差し」で商品盗まれちゃ、こっちは堪らんのだな。

すると、それまで俺の隣でじつと話を聞いていた店員が口を開いた。

「君が見たのは、何だった？」

はあ？ 「見た」？ 何の事だよ？ 誰か俺に説明してくれ。

だが高校生は、店員のこの言葉に過剰な程の反応を見せた。

戻りかけていた顔色がスツと青ざめ、体がブルブルと震え始めた。その振るえを抑えようとしているのか、両手をギュツと握り締めている。

「ともが……」

喉から押し出すみたいにして、言葉を発する。うまく言葉にならないのか、数回、唾を飲み込んだり咳払いしたりを繰り返す。

「子供が……子供がいました。両目のない子供が、僕の背中におぶさって……後ろから首に小さな手を伸ばして……。真っ黒な穴になった目から、真っ黒な血を流しながら僕を見ていたんです。鏡の中から、僕の事をじつと」

その時の事を思い出したのだろう。まるで高熱を出した時みたいに、全身がガタガタと震えている。見ているコチラが気の毒になつてくる程だ。

「店長、どうやら本当に初めてのようですよ、この彼」

……だから。ちゃんと分かるように説明してくれよ。

そう思っているのは俺だけじゃないみたいだ。高校生も青い顔で店員を見やっている。俺と高校生の様子に、店員は一つ息をつくと話し始めた。

「君が見た子供はね。この店にずっと前から棲んでいるモノ達の人だよ。彼等はこの場所が好きで、長いコトここにいるんだ。どうしてここにいるのか、何のためなのか、それは知らないけど、この近隣じゃ有名な話なんだ」

何の話だ？ 棲んでる？ 彼等？ 何だ、そりゃ？

きつと俺の顔には、面積一杯に「？」マークが浮かんでいた事だろう。

「彼等はこの場所を、自分達のテリトリーだと思っている。だからこの場所、この店から無断で何かを持ち出そうとする者に我慢がならないらしい。万引きをして商品をトイレに持ち込む連中がいるでしょう？ 盗んだ物をカバンに入れようとして」

店員の最後の一言に、高校生の肩がピクリと動いた。思い当たる節があるのだろう。

「そうするとね、出て来るんですよ。どう言う訳だか、見る者によって相手が違うみたいで。彼のように初めての場合は、子供が見えるんです」

なる程、それで高校生の盗みが初犯だって分かったってか。

…… って、これで納得してもいいもんなんだろうか？

俺が妙な顔をしているのを見て、店員は「仕方がないなあ」と言うように苦笑した。

「これまでの経験で、ハズれた事は一度もないんですよ。大丈夫ですから、任せて下さい」

自信満々な店員の言葉に押し切られた形で、俺は様子を見る事にした。どう考えたって、相手の方が場数を踏んでるっぽいしな。

そんな俺をよそに、店員は高校生に向かって話し始めた。

「君も反省しているようだし、初犯と言う事で、今回はちゃんと正規の代金を払ってもらってことで大目に見るよ。でも、君がやったのは『万引き』なんて軽いモンじゃなくて、『窃盗』と言うれっきとした犯罪なんだって事を、しっかりと理解してもらわないと」
自分に対して語られる一言一言を、彼は神妙な顔付きで聞いている。

「ここで、こう言う体験をしたって事は、君のためにも良かったと思うよ。遊び半分でこんな事を繰り返していたら、いずれ間違いない警察のお世話になるだろう。学校にだって連絡が行く。そうなっ

たら、君の未来には大きな傷が付くかも知れないぞ。今この場で、何をやるうとしていたのか、自分でちゃんと考えて反省するんだ。もう二度と誘惑に負けないように。さもないと」

今さらながらに、自分のしでかした行為のもたらす結果に思い至ったのだろう。その目に真剣な色が浮かぶ。

そんな高校生の様子に、俺は内心、ちよつと安心していた。この様子なら大丈夫だろうな。自分のやらかした事を理解して反省している。ここで反省出来るなら、再犯の確立はぐんと低くなる。

店員の「さもないと」に続く言葉を、「通報しなければならぬ」もしくは「学校に連絡する」だと、俺は勝手に解釈していた。だが出て来たのは、俺の想像の範囲を大きく上回っていた。

「これから先、君の心に良からぬ考えが生れるたびに見えるようになるよ。鏡だけじゃなくて、それこそ窓ガラスや消えているテレビの画面、プールやお風呂の水面にもね。場所も時間も関係なしに、『映る』もの、『写る』ものの全部に現われる。君が見た子供だけじゃなくて、他のメンバーもやって来るだろう。俗に言う『取り憑かれる』ってやつだ」

想像してみた。……堪らん。

考えてみて欲しい。家の窓、テレビ、パソコンの画面、風呂の湯、飲もうと口をつけたコーヒーの表面。それらに映り、じっと自分を見つめている何モノか。

ポツカリと空いた闇のような両目のない穴が、常に自分を見張っている。消そうとして消えるモノではなく、目にせず、映らず、写らずに生活して行けるとも思えない。

きつと俺と同じように考え、想像したのだろうな。高校生も酸っぱいものを飲み込んだような表情になった。

「本当に、済みませんでした。もう絶対に、こんな事はしません。本当に、本当に、済みませんでした」

ちよつと涙目になりながら、高校生は何度も何度も頭を下げ、盗るつもりだった商品の料金を支払って帰って行った。

それを見送っていた店員が

「あんな風に、聞き分けのいい子ばかりだと、こっちも助かるんですけどねえ」

と呟いているのが耳に入る。

「まあねえ。けど、あんだけ脅かしとけば、また万引きしようって気も起きないんじゃないか？」

高校生の名前や住所などを記入した用紙をファイルに挟みながら、店員に言葉を返す。

「あれ？ 店長は僕が言った事、ただの脅しだと思ってるんですか？」

「だって、そうだろう。あんなの本気じゃないだろう？ 脅かしじやなきゃ、冗談か？」

ファイルを事務机に戻して顔をあげると、店員がニヤツと笑うのが目に入った。

「店長って、この手の話、苦手な人だったんですね。残念ながら脅しでも、冗談でもないですよ。全部、本当の事なんです、これが」

おいおいおい……マジかよ？

「じゃ、何か？ あの『取り憑かれる』ってのも？」

「はい、本当です。実際にありますよ、謝りに来た例が」
興味をそそられた俺は、詳しく話を聞いた。

以前、この近くで独り暮らしをしていた六十代の男性が、うちの店で頻繁に万引きを繰り返していた。

生活費を削るためののか、生来そういった性癖だったのかは不明だが、小さな品を数持って行くので店としてはマークを強化していたようだ。

だが敵もさるもの、店が混み合って店員の手が空いていない時を狙って、やって来る。

数回捕えて厳しく諭したのだが、のらりくらりとして焼け石に水。拳句の果てに、年寄りをいじめるの、独り暮らしから金むしり取っ

て楽しいのか等と、逆ギレして大騒ぎしたらしい。

ほとほと困り果てた店側は、仕方なく警察を呼び、男を連れて行ってもらった。

次に男が店に来た時にどうするのか、当時の店長も頭を抱えていたそうだが、それ以来、パタリと男は店に顔を出さなくなった。

警察できつくお灸を据えられて、男もようやく反省したのかと思っていた矢先。血相を変えた男が店に飛び込んで来た。

店員の制止を振り切ってトイレに駆け込むと、鏡の前で土下座をし、床に頭をこすりつけんばかりにして、必死に謝罪の言葉を繰り返している。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい許して下さいもうしません許して許して許して許してごめんなさいごめんなさい」。

延々と続く謝罪の言葉は、怪しい呪文のように狭いトイレの空間に響いていたと言う。

他のお客の目もあるし、何より営業中にそんな事をされれば仕事に差しつかえる。

血走った眼を据わらせて、床に額をこすりつけている男をなだめすかし、事務所へ連れて行くことにした。

引きずられるようにして事務所へ向かい間も、男はずっと誤り続けている。

どうにか椅子に座らせ、水を与えて落ち着かせる。震える手で湯呑みを支え、一口二口水を含んで、ようやく大きく息をついた。

事情を尋ねる店員に、男はポツリポツリと語り始める。

万引きをするようになってから、家中の鏡やガラスに変なモノが映り込むようになったと言う。その時は特に気にも留めていなかったらしい。

はつきりとしたモノではなく、何やらボンヤリとしたモノが、鏡などを見るたびに自分にまわりついている。だが、自身の年齢もあり、とうとう目にきたかと思う程度だったと言う。

万引きに対する罪悪感はあるとしても、意識に引っかかるのはわずか

な間。またすぐに店の商品に手を伸ばし、カバンやポケットの中へ。そうこうしているうちに、「映り込むモノ」の輪郭がハッキリしてきた。

鏡の中からジツと無表情に自分を見つめている、闇のように空っぽの両目。そこから流れる真つ黒な涙とも血ともつかない体液。

幼い子供の時もある。髪を振り乱した若い女の時もある。頭からダクダクと血を流した中年男性、傷だらけの白髪の老婆だった事もあったと言う。中でも一番恐ろしかったのが、自分と同じくらいの年齢の男性だったそうだ。

全ての歯が抜け落ちた口を動かし、男の罪を責め続けた。

一日や二日ではない。毎日、毎日、鏡の中から、窓ガラスから、停まっている車のフロントガラスから自分を見ている。テレビから風呂から、お茶から、道ばたの水溜りから男の罪を責め立てる。

しまいには、すれ違うだけの人間の眼にも映るようになってたと言う。

実際、それらを見なくても済むように、自身の目を傷付けようと考えた事もあったらしい。家中の窓ガラスをふさぎ、鏡を覆い、見ないようにしても、視界に入ってくる。「映らない」「写らない」ように生活する事は、もしかしたら不可能かも知れない。

そう思い至った時、男は本気で恐怖したのだと。これまで自分がやって来た事が「犯罪」と呼ばれるのだと。今ここでどうにかしなければ、この先どこまでも追って来るのだと。

フラッシュのように考えが脳裏を駆け巡った途端、いてもたってもいられなくなり、店のトイレの鏡に向かって謝ったのだ。

自分が盗みを働き、トイレの個室で商品を隠した時に、その行為を鏡の中からジツと見ていたモノ達に。

男は、これまで万引きした商品がどれくらいの金額になるのか正確には分からないが、と前置きしながら、封筒に入った三万円を置いていったそうだ。

店としてはそのまま受け取る訳にもいかず、何度か男に連絡して

金を返そうとしたらしい。だが男はガンとして受け取る事を拒み、しばらくして引越してしまった。遠方に住んでいた息子夫婦と同居が決まったらいいと言う事だった。

この一件以来、うちの店での万引き被害は目に見えて減ったのだとか。

「まあ、万引き被害がゼロになった訳じゃ、ないんですがね」

店員は語り終わると、軽く肩をすくめた。

「あつと、話し込み過ぎちゃいましたね。レジ、並んでるんで行つて来ます」

バックヤードの仕切り扉を開き、小走りにレジへ向かう後ろ姿を見やりながら、俺は何だかボーっとしてしまっていた。

俺がトイレの連中と会った事があるのかって？ ああ、何度かあるよ。

ただ、彼等には彼等のルールがあるらしくてな。万引き犯達が言うような、おどろおどろしい姿を見た事は一度もないんだ。と言っても、トイレの掃除をしたり、洗面台に花を置いたりする時に、視界の端にチラリと映るだけけどね。

けど、よろしくない考えを持つ人間に対しては、客も店員も関係ないらしい。いや、店を守る立場にある店員に対しての方が厳しいかもしれないな。

俺は机の上に積まれたトイレトペーパーの山を人差し指で弾きながら、目の前に座る人物に向かって言った。

こんだけの量、持ち帰ろうとしたんだ。出来心って訳じゃないよな？ 自分が何をしようとしているか、ちゃんと理解してたはずだろ？ それに、今回が初めてって訳でもなさそうだし。

あん？ 今回が初めてだって？ おいおい、馬鹿言っちゃいけない

いよ。ボールペンやセロテープを一個二個持つて行くのとは違うんだぜ？ 店の備品のトイレトペーパーを五個も六個もデカいカバンに詰め込んで、何食わぬ顔をしていられるなんて、場数踏んでなきや出来ないって。

それにさ。

俺は一ヶ月程前に雇ったばかりのアルバイトに教えてやった。

「君のロッカー扉の鏡からさ、物凄い形相で睨んでんだよ。うちの『非正規雇用社員』達が。しかも、一人一人交代しながらね」

了

第四夜 明け方、四分間のタブー

第四夜・明け方、四分間のタブー

僕が以前働いていたコンビニでの話。

そのコンビニには、いくつか不思議な決まり事があった。

「夕方五時以降は店の前に水をまいてはいけない」だとか、「トイレの鏡の前に花を飾ってはいけない」「雨の日の傘立ては店の中、ドアのすぐ脇に置く」「フロアマットは常に乾いた物を使う事」だとかの、水や雨に関係している事が多かったように思う。

他の店舗ではこんな話聞いた事がないから、僕が勤めていたコンビニが特別なんだろうな。

中でも特に不思議だったのが、コレ。

『午前四時四十四分からの四分間は、店のドアを絶対に開けてはいけない』

明け方の四時四十四分から四十八分までなんていう半端な時間、絶対に店のドアを開けちゃいけないと決められていたんだ。

これって、おかしいだろ？

川沿いにある、住宅街の中のコンビニとは言え、早朝の利用客がない訳じゃない。少し離れてはいるけど、バイパスだって通ってる。配送の車だって来るだろうに。

でも僕が受け持っていたのは休日の昼間だったから、明け方のタブーなんて関係なかった。

「へー。そんな変な決まり事があるんだ」

その程度の認識で済んでいた話だったんだけど。

「安西さん、来週の日曜日の夜って、何か予定入ってるかなあ？」

バイト仲間の中條君から電話があつたのは、火曜日の夕方だった。大学の講義が終わり、図書館で調べ物をしていると携帯が震えて着信を知らせる。

慌てて図書館を出ると、携帯を耳に当てた。

「あ、もしもし、安西さん？」

「もしもし、中條さん？ どうしたんですか？ 珍しいですね、中條さんから電話なんて」

彼とはそう親しい訳ではなかったけど、何回か顔を合わせた事があつた。でも、携帯の番号、教えたっけ？

「急に電話して、悪い。来週の日曜日、俺、夜番なんだけどさ。どうしても外せない用が出来ちゃって。店長に掛け合ったら、代わりに出てくれる人がいるなら、休んでもいいって言われてさ。他のメンバーにも連絡したんだけど、皆ダメなんだよ。で、安西さんと同じシフトの森本さんに頼んで番号教えてもらつたんだ」

勝手に携帯番号調べて悪かった、と電話の向こうで中條さんが謝る。

「ああ、いいですよ。気にしないで下さい」

そう言いながら、僕は思い出していた。

そっか、森本さんか。確か前に、映画のチケットの事で番号教えてたんだっけ。

「それでさ、来週の日曜日の夜なんだけど、どうかな？ 俺、昼間は時間空いてるんだよ。でも、八時以降は、どうしても都合つかなくて。だから、シフト交代してもらえると助かるんだけど」

「ちょっと待って下さい。次の月曜日の講義、確認してみますから」
携帯をアゴと肩で挟み、カバンの中からスケジュール帳を引っ張り出す。パラパラとページをめくり、次の週の授業の予定を調べてみた。

午前中から抗議が入っているようなら、いくら僕でもシフトを交代するのは無理だ。

「ええっと、日ですよね。」

ああ、午前中は休講になってま

すから、大丈夫ですね。代われますよ」

「お、マジで？ 助かるよ。安西さんがダメだったら、どうしようかと思ってたんだ」

僕の返事を聞いて、電話の向こうの中條さんの声が安堵で弾むのが分かった。

「じゃあ、僕が日曜日の夜十時から翌六時までで、中條さんが朝十時から夕方六時まででって事で」

「店長の方には俺からも連絡するけど、安西さんからも言っというてもらえるかな？」

「だったら、帰りに店に寄って伝えときますよ」

本当に助かったよ、恩に着る。そう言っって中條さんからの電話は切れた。

あの様子じゃ、相当焦っってたんだろうな。さて、それはそうとして、これからどうしよう？ 今さら図書館で調べ物をするって気分でもないし。

携帯の画面に目をやれば、もうすぐ六時になるうかという時刻だ。駅の近くのファミレスでコーヒーでも飲むか。その前に本屋に寄って、今日発売になっているはずのコミックの新刊でも物色してみよう。カバンのヒモを肩にかけると、僕は大学の敷地を歩き出した。

僕の住んでいる町は、中心を流れる川に分断されている。さして大きくはない川だが、隣町との境に差し掛かる頃には一級河川へと注ぎ込む。今でこそ護岸工事によってキレイに整えられてはいるけれど、二十年位前までは大人の背丈程の草が生い茂る土手が続いていたそうだ。

川が流れているからという訳じゃないだろうが、町全体が湿っている感じがする。そんな土地だ。水捌けが、あまり良くない。雨が降ったりすると、道のあちこちに水溜りが出来て、なかなか干かない。

梅雨や秋の長雨の季節になると、まるで湿地で暮らしているよう

な気になる。吸い込んだ大気に含まれた水分が、肺というフィルターを通して全身に運ばれる。

ちようど川の流れが澱んで水が濁るみたいに、この町の風も澱んで濁っている。僕が住んでいるのは、そんな町だ。

コンビニのある場所は、暗渠あんきょになった川が地面にもぐり込むちようど入口の部分にある。地下で緩やかにカーブを描き、少し離れた線路沿いに顔を出す。

元々この辺りは一時的に水深が深くなっているうえに、左手に向かってカーブしている場所だった。そのせいなのか、上流から勢いをつけて流れてきた水がこのカーブでスピードを失い、澱む。

昔は長雨のたびに増水して大変だったと、土地に住む年寄りは良く言っていた。

いつもより早い時期に発生した季節外れの台風のせいで、二、三日前から天気がグズつき始め、町は常より更に濃い湿度の底に沈んでいるように思えた。

中條さんと約束をしていた日曜日も、朝からどんよりとした厚い雲が垂れこめ、ジツトリと不快な空気が漂っている。

たまに時間が出て、溜まっている汚れ物を片付けようとするコレだ。仕方がない。こんなに湿度の高い日に部屋干しなんて、御免こうむりたい。

僕は汚れた衣類をバッグに詰め込むと、自転車で実家に向かう。コインランドリーに行くよりも近いし、何より金がかからない。浴室乾燥を使わせてもらって、ついでにゆっくりしてこようか。

実家までは自転車で三十分程度、日頃運動不足を自覚している僕にはいい運動かも知れない。

大学進学を機に一人暮らしを始めた訳なんだけど、別に通学に便が悪かった訳じゃない。ちようど同じ頃に四つ年上の兄貴が結婚し、実家で母親と一緒に暮らす事になったからだ。

父親は高校二年の時に他界し、それからは母が一人で僕達兄弟の

世話をしてくれていた。幸い父親が残してくれた生命保険があつたし、高卒で既に社会に出ていた兄の勧めもあつて、僕は大学進学を決めた。

学生時代から付き合っていた彼女との結婚が決まった時、母は二人に新居を構える事を提案したんだけど、兄貴と彼女のたつての願いで同居する話でまとまった。

んで、僕はというと。

さすがに新婚夫婦と一つ屋根の下で生活するつてのは……ねえ？僕だつて一応は年頃の男性なんだからさ。

以上の理由から実家を出て、一人暮らしをしている。それでも一、二ヶ月に一度は顔を出して、夕飯をごちそうになったりする。

「うあ、ヤバ。降つて来た」

ペダルを踏み込む僕の顔に、雨粒が当たる。とうとう降り出したんだ。本降りになる前に、実家に着かなくちゃな。自転車をこぐ足に力を入れる。

急いだ甲斐もあつて、雨脚が強くなる前に実家のガレージに滑り込む事が出来た。

『はい？』

チャイムを押すと義姉の声が応える。

「あ、浩幸です」

『あら、浩幸君。ちよつと待つてね』

数秒後にドアの力ギが開き、義姉が顔を出した。

「雨、大丈夫だった？ さ、早く入つて」

いつも思っただけど、実家に帰る時に一番しつくりくる挨拶つて何なんだろう？

自分の家なんだから「ただいま」でいいのか。それとも兄貴夫婦の家でもあるんだから「お邪魔します」なのか。帰るたんびに迷うで、結局「お邪魔します」とか言っちゃう訳なんだ。

「浩幸君の家なんだから、そんなにかしこまらなくてもいいのに」
そう言って義姉は笑うけど。やっぱり、自分が住んでいた頃とは
空気が違う。少しは緊張もするし、遠慮もある。

「日曜日なのに、珍しいわね」

「今日は、バイトの時間が違うんですよ。知り合いに頼まれちゃっ
て」

事情を説明して洗濯させてもらえるか尋ねると、快くOKしてく
れた。

洗濯機に汚れ物を放り込み、洗剤を計っているとリビングから声
をかけられた。

「コーヒー、飲むでしょ？」

「あ、はい、お願いします」

スタートボタンを押せば完了。後は機械のお仕事だ。

「そう言えば、兄貴と母さんは？」

さつきから姿が見えない。

「康浩さんは、修理に出してた携帯を引き取りに行っただわ。代替機
は感覚が違うから使いにくいってブツブツ言ってたから、ようやく
静かになりそうよ。お義母さんは買い物。お昼までに行けば、野菜
が安いからって」

ああ、あそこのスーパーか。日曜日は昼までに行けば、野菜の安
売りをしてたっけ。

「もうそろそろ戻って来る頃だと思うけど。なあに、私と二人じゃ
気まずい？」

「いや、別にそう言う訳じゃ。日曜の昼間だから、皆いるかな？
と思ってたし」

しどろもどろになりながら弁解するけど、本当のところは少し気
まずい。

兄貴と付き合っていた頃から知ってはいるが、「兄貴の恋人」と
「兄貴の嫁さん」ではやっぱり違う。

出されたコーヒーを飲みながら、他愛のない会話に適当に相槌を

打ち、兄貴が母親のどちらかが早く帰ってきてくれる事を祈った。
義姉は余程、暇を持て余していたんだろう。最近のドラマから映画の話まで途切れる事がない。

そうこうしているうちに、洗濯終了を知らせるメロディが聞こえてきた。

「ちよつと行ってきます」

少しホツとして脱衣所へ行き、洗濯物を入れたカゴを抱えた時、玄関でドアの開く音がした。

「ただいまー。あら、誰か来てるの？」

「お義母さん、お帰りなさい。少し前に浩幸君が」

「へえ、珍しいわね、日曜日に」

そんな会話を耳にして、僕は思わず苦笑する。この家では、日曜の昼間に僕がいるのは珍しい事らしい。

洗濯物を片付け、カゴを所定の位置へ戻してリビングへ。

「お邪魔してるよ、母さん」

テーブルの上に買い物袋を置いて戦利品を広げていた母に声をかけた。

「どうしたのよ、急に」

「今日のシフト、夜番の知り合いと代わったんだよ。久し振りに時間も出来たし、溜まっていた汚れ物を洗濯しようと思ったんだけどさあ。そう言う時に限ってこの天気だろ？ 僕の部屋じゃ干すスペースもないし、浴室乾燥使わせてもらおうと思って」

「あらあ。じゃあ、使用料取らなきゃね」

「お義母さん、そんな事言つと、浩幸君本気にしちゃいますよ」

「冗談よ、あはははは。と軽快に笑う母親を見ながら、僕は内心「半分は本気だったな」と考えた。

夜までゆつくり出来る事を知ると、じゃあ夕食は一緒に食べられるのね、沢山作らなきゃ、と母は嬉しそうだ。義姉さんと二人で台所に並び、ああでもない、こうでもないと話をしている。

我が家では、世に言う「嫁・姑問題」は縁遠いモノなのかも知れない。

まだまだ自分の健康に自信のある母は、以前から勤めているパートを続け、時間のある日は趣味のサークルにと忙しい。いい加減、パートを辞めて家でゆつくりしたらどうだと言ったら、笑顔で即却下された。

『一つの台所に二人の主婦は争いの元なのよ。今は私も元気なんだし、涼子さんも好きな事をすればいいの。先の事は分からないけど、今はこのままでうまく行ってるんだから』

それが母の言い分で、僕には考えも及ばない様々な事を思ってるんだと知った。

やがて兄貴も帰宅し、久々に家族勢揃いだ。

出された菓子をつまみながら、兄貴と大学の話やらバイトの話やらで盛り上がる。

「そう言えば、あんたのバイトしてるコンビニって、あの川の傍なんだっけ？」

濡れた手をタオルで拭いながら、母親が話に入ってくる。

「うん？ ああ、そうだよ。ちょうど川が潜る辺りにあるお店」
新しく淹れたコーヒーに砂糖を投入しながら、僕は答えた。

「あの辺りって確か、変な噂があったんじゃないかしら？」

あこの先に指を当てて首を傾げながら、ねえ涼子さん、聞いた事なあい？ などと義姉に声をかけていた。

「何だよ、変な噂って？」

せんべいの塊を噛み砕き、コーヒーと一緒に飲み下す。

台所での用事が済んだのか、義姉が二人分のコーヒーを持って加わった。

「噂って、あれですか？ 雨の日の夜には、川縁かわべりに出るって話」

母の前にカップを置くと、自分のカップを持って兄貴の隣に座る。

「ああ、何かそれ聞いた事があるな。高校ン時に有名になったよ。

浩幸のバイト先って、そこらへんなのか」

「何の話だよ？ 全然分かんないし」

僕一人だけ取り残されてる気分だ。

機嫌が悪くなりかけているのを察したのか、母がまあまあとなだめにかかる。

「もう三、四十年ぐらい前になるかしらね。あの辺りって、工事して暗渠あんきょになる前はカーブになってたでしょ？ あそこだけ急に深くなってたし」

「だから工事の時、水深の差を利用して暗渠にしたんだろ？」

「そうなのよ。あの川はね、長雨、大雨の時期には良く氾濫したの。周辺ではかなりの被害が出てね。一気に増えた川の水が、カーブの部分に流れ込んでくるから、耐え切れなくなつて決壊しちゃうのね」

護岸工事以前のこの町が、たびたび水害に悩まされてきた事は、小学生の時の授業で教わつた記憶がある。亡くなつた人の数も半端じゃなかったつて。

「だからあの辺りは遊水地として利用されてたんだよ。民家を建てないようにしてね。川の事故や増水で亡くなつた方のために『川施かわせ餓鬼』もやってたのよ。でも整備が始まつてからは、そんな事もしなくなつちやつたし」

バイト先のコンビニも含めてあの辺りは、暗渠が完成した後で開発された土地なのか。元々が遊水地利用されていた場所だから、常に湿っているのよに感じるのかも知れない。

「その頃からかしらね、妙な噂が聞かれるようになったのは」

一旦言葉を切つて、コーヒーを口に含む。

いや、だから。その『妙な噂』つてのを知りたいんだけど。

「ええつと、確か『雨の夜は川から死者が這い上がつて来る』だっけ？」

「そうそう、聞いた事ある。雨に呼ばれて死んだ人達がやって来るから、出歩かない方がいいって」

オカルトやホラーに関しては全く興味のなかった僕にとって、始めて耳にする話だ。と言うより、自分の家族がこの手の話を目を輝

かせて語る人種だった事に驚きだ。

「おばあちゃんが川向こうに住んでいたけど、子供の頃、良く怒られたわ。雨の日に使った傘を玄関先に置いておいたら、『家の前に雨を呼ぶ物を置くと、ガモウジャがやって来るからやめなさい』って。でも今でも分からないの。『ガモウジャ』って何？」

義姉が兄貴に尋ねるが、あいにく兄貴も知らないらしい。僕も知らない。で、三人揃って母親を見る。

コーヒークップを両手で包み、ゆっくりと中身を口に運んでいた母が肩をすくめる。

「あんた達ねえ。オカルトネタもいいけど、自分達の住んでる土地の事なんだから、もう。『ガモウジャ』ってのは『川亡者』の意味よ。川の事故や水害で亡くなった人の事で、『カワモウジャ』が縮まって『ガモウジャ』になったの」

「じゃあ『雨を呼ぶ物を置くな』って言うのは、どういう意味なんですか？」

義姉の質問に、母は窓の外で降り続ける雨をチラリと見た。

「ここに昔から住んでいる人なんかは言うわねえ。濡れた傘や雨水の溜まったバケツなんかを置いておくと、その水が『ガモウジャ』を呼ぶと思われたの。ほら、霊とかって水気のある湿った場所に出るって言うじゃない。だから、出来るだけ水気のある物を家の周りに置かないようにしてるのよ」

母親の話聞いていて、僕はコンビニの事を思い出した。

『雨の日の傘立ては、店の外ではなく店内に置く事』

以前から不思議には感じていたけど、土台にはそういう事があったのか。なら、他の奇妙なルールにも似たような謂れがあるのかも知れないな。

「浩幸は徹夜になるんだろ？俺のベッド使っていいから、夜まで眠っておけよ」

僕が使っていたカップを持ち上げ、兄貴が笑いながら軽く肩を叩いてくる。

「俺も経験あるけど、ちょっとでも眠つとかないと完徹はキツイぞ」
まあ、確かに。普段は日中のバイトしかしてないから、体力的にも精神的にもキツイかもしれない。

せつかく兄貴がこう言ってくれているんだから、好意に甘えよう。
「うん、じゃあ、そうさせてもらおうよ」

リビングにいる面々に声をかけると、僕は二階へ上がって行った。
階段を上がってすぐのドア。以前まで僕が使っていた部屋だけど、今は不用品が詰め込まれ、物置きとして利用されている。廊下を挟んだ向かいに母の部屋。そして廊下のドン詰まり。一番奥に兄貴夫婦の部屋がある。

ドアを開けて立ち止まる。いくら兄貴の許可をもらったとはいえ、そして、いくらベッドは個々の物とは言え、やっぱり人様夫婦の部屋で横になるのは気が引けるかな。

大判のケットを一枚借りると、久し振りに自分の部屋へ入ってみた。家を出る時に置いて行った僕の荷物が、そのままになっている。思った程埃っぽく感じないのは、窓を開けて空気の入れ替えをしてくれているからだろうか。

兄貴の部屋にあったソファが、壁際に置いてある。その傍には、僕が残して行った本棚が。目に付いた一冊を抜き出してソファに転がる。

やっぱり落ち着くな。

本のページをめくりながら、窓を叩く雨音を聞いているうちに、うとうとと眠りに引き込まれてしまった。

真つ暗な空間に僕は立っている。

否、座っているのか？ 良

く分からない。何も見えない。どこまで広がっているのか知る事も出来ない、そんな闇の空間に僕はいる。

方向感覚も正常に働かないのだろうか。自分が今、上を向いているのか下を向いているのか、それとも横たわっているのか。それすら定かではない。

視力が効かないからだろうか。聴覚が敏感になっているようだ。無意識に周囲の音を拾おうと集中している。

僕の耳が、小さな音を捕えた。細い音が途切れる事なく続いている。

何の音だ？　すごく聞き慣れている気がする。それでいて、日常生活の中で意識に上がってくる事は薄い。そんな音だ。

僕がその音に気付いたからだろうか。急に耳に届く音が大きくなった気がする。

これは　この音は、川だ。

闇は音を吸収するのだろうか。それとも反響させるのだろうか。流れる、流れる、川の音。水の音。……の音。

何の音だって？　僕は自分の思考に疑問を投げかける。川の音以外に何が聞こえたって言うんだ？

音の正体が知りたくて、全神経を耳に集中させる。

間断なく流れる水の音。その音に紛れて、確かに聞こえる。

湿った重たい物体を引きずるみたいな音。濡れた柔らかい物体を打ちつけるみたいな音。そして周囲に満ちる濃厚な気配。

自分の鼻先も分からない暗闇の中から、何かが僕の事をじっと伺っている。僕が耳を澄まして辺りの様子を伺っているのと同じように。

今にも闇のあちこちから無数の腕が伸びて来て、僕の体に掴みかかって来るんじゃないだろうか。

ほら、あそこに。こっちにも。僕をジッと見つめる目が。いや、もしかしたら、闇より尚深い虚ろがポツカリと　。

「……くん……浩幸君。浩幸君、起きて、浩幸君」

肩を揺り動かされて、僕はハッと目を覚ました。

「あ？ ああ、義姉さん」

「随分と良く眠ってたみたいだけど、疲れてるの？ 大丈夫？」

「ええ、大丈夫です」

目をこすりながら上体を起こす。眠ったはずなのに、頭の芯にジンとした痺れが居座っている気がする。

何だかひどく嫌な夢を見ていたと思うんだけど……内容が抜け落ちている。そして気持ちの悪さだけが残っているのだ。

「それにしても驚いたわ。向こうの部屋にいないんだもの。一瞬どこに行ったのかと思っちゃったわよ」

僕の手からケットを受け取り、義姉は穏やかに笑う。その顔を見ながら、僕はちよとだけ気分が落ち着くのを感じた。

「急に自分の部屋が懐かしくなっちゃって。すみません」

やだ、どうして謝るの、浩幸君の家なのに。と笑う義姉に促されて部屋を出る。

すでに洗濯物の片付けられた浴室でシャワーを使い、にぎやかに夕食のテーブルを囲んでいるうちに、夢の事はすっかり頭のどこかへ押しやられてしまった。

時計が九時十五分を回った頃、じゃそろそろ、と僕は腰を上げた。「まだ雨降ってるから、自転車も荷物も、うちに置いて行きなさい。明日は大学あるんでしょう？」

夕食の片づけを終えた母が、カーテンの隙間から外の様子を伺いながら僕に声をかけてきた。

まだ降ってるのか。こりゃ、本格的に台風到来か？

明日の朝もう一度実家に寄り、休ませてもらってから大学へ向かう事にして、僕は夜バイトへ。

雨は昼間より勢いを増している。確かにこの降りじゃ、自転車は置いて行くしかないな。自宅アパートから向かうよりも少々時間を食うけど、無理をしてビショ濡れになるよりもマシだ。

アスファルトに溜まる雨水を跳ね上げながら店に着いたのは、それでも予定していた時間よりも幾分か早かった。

「おはようございます」

たたんだ傘を振って雨粒を飛ばすと、店内に設えられた傘立てに突っ込んだ。

「おはようございます」

雨の日は床が泥で汚れるために、通常よりも多めにモップをかける。ちょうどドアの前をモップがけしていた店員が、僕の声に顔をあげて挨拶を返してくれた。

フロアマットで念入りに靴を拭い、事務所でタイムカードを押す。制服に袖を通していると、モップを抱えた店員が入って来た。

「今日は安西さんなんですね」

「うん、中條さんの替わりだね」

ロッカーにモップをしまうと、コキコキと肩を鳴らす。

「やな雨ですねえ」

「台風、来てるみたいだし。長引くかも」

軽く世間話をしながら身支度を整え終わる。

「こんな夜は、お客さんも少ないだろうし。のんびりやるよ」

僕の言葉を聞いた店員は、浮かべいた笑顔を引っ込めて表情を改めた。

「安西さんって、この店の変なルール知ってますよね？」

「あの『傘立ては店内に』とか、『夕方五時以降は店の前に水をまいてはいけない』とかってヤツ？」

「そう、そうです。でも一番大事なのは『明け方四時四十四分から

の四分間、店のドアを開けてはいけない』ですから、気を付けて下さいね」

うちの店のコンビニルールで、最も訳が分からないのがコレだ。「何なんでしょうね、このルール？」

首をひねっている僕に、明日の朝が来れば嫌でも分かりますよ。と説明にならない説明をした店員が、最後にポツリと付け加えた。

「だから、絶対にドアを開けちゃダメですからね。忘れないで下さいよ」

振り向いて見た相手の顔は、全く冗談を言っているようには思えなかった。

夜十時を回ると、雨はさらに勢いを増した。わずかにドアを開けてみれば、近くを流れる川が普段とは違う騒々しい音を立てているのが分かる。

濡れたフロアマットを取り換え、出来るだけ乾いた上体をキープする。傘立てが店内にあるために、どうしても床が水浸しになってしまう。レジの後ろにモップを持ち込み、人の途切れた隙を見計らって床を拭く。

そう言えば、うちのコンビニに来るお客さんで、店内の傘立てを不思議に感じる人はいないようだ。

皆、当たり前のように店の前で傘を振り、当然のように店の中の傘立てに差し込む。

ふと僕の頭の中に、昼間家族と交わした会話が浮かんた。

『家の前に雨を呼ぶ物を置くと、ガモウジャがやって来る』

そんな迷信が、地域に根付いていると言う事なんだろうと思う。

「いやあ、すごい雨だねえ」

傘の滴を振り切って店に入って来たお客さんが、苦々しげに呟く。「本当にすごいですねえ。このまま、本格的に台風が上陸しちゃうかも知れませんね」

レジに並べられたのはビール数本と、つまみ。指定された銘柄のタバコが二つ。今夜は家に籠って雨をやり過ごすんだろ。ある意

味、うらやましい。

対人センサーの電子音が店内に響く。だが開いたドアから聞こえる雨音と増水した川の流れる音に、かき消されそうになる。

今夜最後の納品が十一時二十分。この天気じゃ、もうお客さんも来ないかな。のんびりと検品、陳列が出来そうだ。

しかし、本当にすごい降りだ。こりゃ土嚢を用意しといった方が、いいかも知れないなあ。

雑誌を並べ直しながら、窓の外の様子を伺ってみる。だけど風も出てきたようで、雨粒が窓ガラスに吹き付けられ、様子なんて分かりやしない。ただ、相当に激しい雨が降っている、とだけ。

定時刻に遅れる事、数分。コンビニのドアの正面につけたトラックから、業者さんが走り込んで来た。

ほんの数秒の事なのに、風にあおられた業者さんのユニフォームはすっかり濡れてしまっていた。

ドアを開き、僕も商品の搬入を手伝う。ようやく全ての商品を運び入れると、サインの記入された伝票を持って慌ただしくトラックに乗り込み、業者さんは去って行った。この雨の中、まだまだ納品に出向かなくちゃいけない場所があるんだろう。

大変だなあ。さっきはビールのお客さんをうらやましく思ったけど、業者さんに比べたら僕の方が楽だよな。

とりあえず雨風はしのげる訳だし、このまま朝までお客さんは来そうにないし。

そんな事を考えながら、スキヤナーを片手に商品をチェックしていく。

それにしても、凄い雨だ。こういうのを例えて「空が抜けたような」とか「バケツを引つ繰り返したような」なんて言うんだろくな。店内に流れる音楽と雨の音をBGMに、のんびりと作業を進める。お客さんは予想通りで、タクシーの運転手がトイレを借りに来たのと、トラックの運転手が夜食のカップラーメンとおにぎりを買いに

来ただけ。静かなもんだ。

午前三時半に時計の針が達しようかという頃には、全くお客さんは入らなくなってしまった。

誰もいないうちに僕も夜食を摂っておこうと、レジに鍵をかけて事務所へ向かう。ロッカーの中には、バイト前に購入しておいた菓子パンとジュースが入っている。

スチール机の上のビデオモニターの前に陣取り、パンをジュースで流し込む。視界にあるモニターには、誰もいない無人の店内が映っている。

こうやって見ると、真夜中の無人のコンビニって、昼間目にしてる店とは別の雰囲気を持っているんだと思う。

辺りは真っ暗で、場違いに明るい店内放送、建物の屋根を叩く強い雨音と、腹の底に響くような低い川の水音。こんなのは、僕の知っている世界とは違う。きつと時計の針が午前零時を回った瞬間、別の空間へジャンプしてしまったんじゃないか、そんな気さえしてしまう。

僕の意識を刺激したのは何だったのだろう。対人センサーの来客を告げるチャイム音か？ それとも強さを増した雨の音か？

ハッとして目を覚ます。どうやら、知らないうちに眠り込んでしまったみたいだ。僕が気付かないうちにお客さんが来ていたら、大変だ。『買い物に行つたのに店員が出て来なかった』なんてクレームが来るかも知れない。

僕はそこまで考え、冷や汗をかきながらスチール机から上体を起こす。頭を大きく振ってダルさを払い落とすと、小走りに店内へ戻った。

店の中は相変わらずガランとしていて、誰もいない。ドア付近の床にも、来客を示す水に濡れた跡は残っていない。最後に来たトラックの運転手が帰った後、床をモップで拭いた。だから誰かが入ってくれば、床の上には水の跡か足跡が残るはずだ。

それを確認した僕は、ちよつと安心して息を吐いた。けど、店長には報告した方がいいだろうな。万が一のために。

でも、だとしたら、眠りから僕を引き戻したのは何だろう？

店の壁にかけられた時計に目をやれば、時刻は午前四時四十分をわずかに過ぎたところ。

『一番大事なのは明け方四時四十四分からの四分間、店のドアを開けない事。絶対にドアを開けないで』

同僚から聞いた言葉を思い出す。

『雨の夜には川から死者が這い上がって来る』

『川の事故や増水で亡くなった人のための供養をしなくなってから、妙な噂が立ち始めた』

昼間、家族から聞いた会話の内容が頭の中を駆け巡る。

背筋を冷たいモノが流れていく気がして、ブルツと全身に震えが走る。

「いや、そんなの……きつと何か他の原因があるんだよ。この時代に靈とか……ある訳ないし」

自分自身に言い聞かせるように呟くが、その声が空間に虚しく響く。と同時に、この店内にいるのが自身一人だけなんだと言う事を、強く意識した。

時計の針は僕の思考を嘲笑うかの如く、容赦なく進み続ける。

きつと深酒をした、たちの悪い酔っ払いでもやって来るに違いない。だから、店のドアを開けないようにしろ、なんて妙なルールが出来たんだ。そうに違いない。

どうにかして自分を納得させようと、もつとらしい理由を見つけるために頭をフル可動させる。

吸い寄せられた視軸の先で、無情にも時計の針は四時四十四分を指してしまった。

キュウウイイイ。

時計を見上げていた僕の後ろで、機械が起動するかすかな音がした。驚いて振り向くと、入り口脇に置かれているコピー機に作動を

知らせるランプが点っている。

どうしてだ？ 誰もいないのに、何でいきなりコピー機が動き出すんだ？

もちろん、どこコンビニにでも設置してある、一枚十円でコインを投入するコピー機だ。待機状態にあるとは言え、勝手に動くはずがない。

笑いそうになる膝を動かしてコピー機の目に立つ。コインの投入機にはランプが点いていない。つまり、硬貨は入れられていないって事だ。

「誤作動 か？」

何てタイミングだよ、驚かすなって。

フーツと息を吐き出す。電源を落とそうとコピー機に手を触れた瞬間。

ガ
ッ

「うわっ！！」

いきなりコピー機が動き出した。独特の青緑色の光がガラスの原稿台と押さえの隙間から洩れ、セットされた用紙が送られる。

何の変哲もない、いつもと同じ機械の動作。……それが、誰もスタートボタンを押していない事を除けば、の話である。

用紙が一枚、排出トレーに吐き出された。その用紙に恐々と指先を伸ばす。まるで、真つ赤に灼けた鉄を触るように。得体の知れない、おぞましいモノに触れるように。

コピー用紙は、一面、トナーインクで真つ黒に塗り潰されていた。所々に見える、白く丸い空間は何だろう？

僕が用紙を確認した途端、再び機械が動き始める。光る、排出する、光る、排出する、光る……止まらない。

トレーに溜まっていく用紙は、どれも同じように黒で塗り潰されているみたいに思えた。だけど。

「これって……風景か？」

画質の悪い写真を、さらに白黒で粒子を粗くしてコピーしたように感じられる。

良く良く見てみれば、写っているのは通りの風景だ。最初に一枚は真っ黒だったせいで気が付かなかった。丸い空白部分は、街灯の光だ。

コピー機は、相変わらず用紙を消費し続けていて、止まる気配はない。為す術もなくそれを見つめていた僕は、わずかな変化を認めた。

「店に近付いて来ているのか？」

写っているモノが景色だと分かれれば、しかも、住んでいる町の景色なら、変化を見つけるのは簡単だ。

用紙に写し出された景色は、徐々に近付いて来ている。今、僕がいる、たった一人でいる、このコンビ二に。

近付いて来るモノが何なのか分からないけど、マトモなモノじゃないって事ぐらい想像がつく。

降りしきる雨の音が、僕の耳に突き刺さる。足許から這い上がって来る寒気が、全身に毒のように回る。

こんな　こんなモノが写った紙を手にしていて、大丈夫なんだろうか？

そう思った瞬間、自分の手の中にあるコピー用紙が、恐ろしく忌まわしい存在に見えてきた。放り出すようにして手を離す。

ガ　　ッ　　ガガッ

それを待っていたんだろうか。延々と紙を排出し続けていたコピー機が、ピタリとその動きを止めた。電源も落ちている。今の今まで勝手に動いていた事など、何かの間違いだったみたいだ。

店内の静けさと店外の雨音の対比が、耳に痛い。気付けばいつの間にか、点ネイ放送が消えている。

「何で　　あり得ない……」

有線放送のスイッチは事務所にある。僕がここにいる以上、誰もスイッチには触れる事はないのに。

だが、その考えを頭を振って払い落とす。現に今まで、誰も触れていないコピー機が動いていたじゃないか。僕の目の前で。

一体、いつまで続くんだ、こんな事？

人間の習性なのだろうか。自然と視線が壁に掛けられた時計へと向かう。

「四時四十……七分……」

秒針は三十秒を示す「六」を越えたところだ。

店のドアを開けてはいけなさとされる時間は、四時四十四分から四十八分までの四分間。だとすれば、禁忌とされてる時間はもうすぐ終わる。残り三十秒もない。四十八分を回れば、こんな訳の分らない事も終わるはずだ。

ゴールが見えた事で、僕の気持ちにも少し余裕が生まれた。

明け方五時にもなれば、朝刊も入って来るし、仮眠をとるためのトラック運転手もやってくる。床の上にコピー用紙が散乱したままでは、さすがにマズイだろう。正直、触りたくないが、仕方がない。腰を屈めて、床に散らばった用紙を集め始めた。しかし、この用紙分のカウンターをどう店長に説明すればいいと言うのか？

カウンター数と投入金額が一致していないのは、照らし合わせてみればすぐに分かってしまう。まさかとは思うが、僕が払うはめになるんだらうか？

そんな事を思いながら用紙を集めていた僕の手が、一枚の用紙の前で止まった。

変わり映えのしない、黒く染まった紙面に白く抜けたコンビニの店舗が認められる。その明りに誘われるように、細い棒状のモノが何本も写り込んでいる。

「これは　？」

紙を持ち上げた僕は、視界の端に何かを見たような気がした。そ

つと顔をあげる。

どうして人は、こんな時に確かめようとしてしまうのか。絶対に見ない方がいいモノに決まっているのに、それでも確認せずにはいられない。

きつと目にする事で、大したことじゃないと自分に言い聞かせるためだ。『何だ、枯れ尾花じゃないか』と。

そう、大した事なんかないんだ。冷静になれば、笑って話せるよ。うな事なんだよ。そうさ、そうに決まっている。

そこで

僕が

見たのは

ドアの隙間を

無理矢理

こじ開けようと

うごうごと蠢く

いくつもの

指 指 指 指

節くれ立った男の指

マニキュアに彩られた女の指

小さくむつちりとした子供の指

シワに包まれた老人の指

白くふやけて崩れかけた指

敗れた皮膚から骨の飛び出した指

折れ曲がった指

指 指 指

数え切れない無数の指が、わずかな隙間から店内に入り込もうと暗闇の中で蠢いているのだ。

指の波が動くたび、ドアのガラスがたわむ気がする。今にも指達が店内に雪崩れ込んできそうだ。

思わず立ち上がって内側からドアを押さえる。正面から不気味な指と向き合う勇氣はない。だから背中ではドアを押さえ、両足を踏ん張る。

あんなモノが店内に入ってきたら？ 到底、マトモな精神ではいられない。

背中にガラスを引っ掻く、微かな振動が断続的に伝わって来る。早く、早く、早く、早く終わってくれ！ このままじゃ、おかしくなってしまう。頼む、一秒でも早く、この時間が過ぎてくれれば！

首をひねって壁の時計を見上げた。もう、随分と経ったような気がしていたが、まだ秒針は天頂を過ぎてはいなかった。

まだか？ まだなのか？ 早く！ 早く！

ギリギリと焦る僕の思いとは裏腹に、秒針の進みは間延びして感じられる。

あと五秒。あと五秒で、この悪夢のような時間から抜け出せる。

あと四秒。まだか？ まだ四秒もあるのか？

あと三秒。背中に伝わる振動は消えない。

あと二秒。早く！ 早くしてくれ！

あと一秒。頼む！

秒針が 天頂を越えた。断続的に伝わってきた振動が、消えた。

「 終わった……のか？ 」

知らず、詰めていた息を大きく吐き出す。気付けば全身に冷たい汗が噴き出していた。手の平で額の汗を拭った僕は、自分の両手が震えているのを目にして苦笑した。

「 もう、大丈夫、大丈夫だ。時間が過ぎたんだから。もう、終わったんだ 」

ドアに背中を預けて、ズルズルと床に座り込んだ。

大きく頭を振って、数分間の出来事を払い落そうと試みる。

忘れよう。忘れるんだ。こんな事、現実であるはずがない。忘れてしまえば、大丈夫。これから先、夜番のシフトに入らなければいいんだ。

自分に言い聞かせ、気持ちを切り替える。

仕事だ。仕事をするんだ。仕事に集中すれば忘れられる。

立ち上がり、振り向いた僕の網膜に灼き付いたのは 。

白みかけた明け方の空をバックに、ドアのガラスに張り付いた……巨大な顔。ガラス一面にブヨブヨとふやけた皮膚を波打たせた水死者の顔。波打っているのは、皮膚の表面に無数の人面が浮かび上がっては沈んでいるからだ。

藻のように揺れているのは、濡れた髪か。虚ろに見開かれた眼球は白濁し、まるで腐った魚のような色をしている。膨れ上がった舌が、だらしなく開いた口からダラリと垂れ下がり、ドアのガラスを舐めている。

「ぎ……ぐうつ」

喉の奥に不快なモノがせり上がって、ぐぐもった声がもれる。それに気が付いたのか、まばたきをしない濁った眼球がグリグリと動く。色を失くした瞳が僕を捉えた瞬間。

僕の口から言葉にならない叫びがあふれ、そのまま意識を手放してしまった。

次に僕が目覚めたのは、病院のベッドの上だった。心配そうに僕の顔を覗き込む母と、兄貴夫婦の姿が見えた時、ようやく自分の日常に戻って来る事が出来た安堵感に涙が止まらなかった。

コンビニの店内で倒れていた僕を発見した朝刊配達の人が、慌てて救急車を呼んでくれたらしい。

幸いにも外傷等はなく、疲労や偏った食生活による一時的なものだろうと言う事で、僕はその日のうちに帰れる許可が下りた。

一体何があったのかと家族にしつこく問い質されたが、あの数分間の出来事を口にする気はなかった。口にすれば、どこまでのあの「ガモウジャ」が僕に憑いて来るような気がしたからだ。

あんなモノがこれから先も自分の生活の中に入り込むかも知れないなんて、正気じゃられない。

大事をとって講義を休み、実家で眠らせてもらった。

居間に敷かれた布団の中で、僕は心に決める。

明日、店長に謝って、そしてバイトを辞めさせてもらおう。あんな経験をして、あのコンビニでバイトなんて無理だ。

アパートも……引き払おうか。母と兄貴夫婦が許してくれば、実家に戻るのもいいかも知れない。

可能な限り、コンビニにも川にも近寄りたくない。

あんなモノとの関わりなんて一切ない、平穏な一条を取り戻すんだ。

そう強く心に願って、僕は眠りに就いた。

止む気配をみせず降り続ける雨の中、窓の外から部屋の様子を伺う……この世ならざるモノの存在にも気付かずに。

そう、コンビニのバイトを辞める事は出来ただけど、「ガモウジャ」との関わりは切れることはなかったんだ。

今でも雨の日には、連中の気配を感じる。

窓の外から僕を伺い、隙あらば取り込んでしまおうと狙っている「ガモウジャ」の気配を……。

了

家庭ゴミはご遠慮ください

うちの近所にあるコンビニの、仲良くなった店員さんから聞いた話。

そこのお店はバイパス沿いであって、大手ラーメンチェーンの店舗やファストフードの店舗と駐車場を共同で使用している。

深夜まで営業しているためか、利用客も多く、食事に来た人がついでにタバコや雑誌を購入していくので、売り上げも上々のようだ。我が家から道路を挟んで斜向かいにあるそのコンビニは、私にとって非常にありがたい存在で、調味料が切れた時や料理をもう一品増やしたい時などに重宝している。

あまりにも近くにあるために、一日に三回も四回も行ってしまう、すっかり常連として店員さん達に顔を覚えられている。

ホットコーナーの一押し商品や新しいデザートメニューが入ると感想を求められる事もあったりするし、見えにくいレイアウトについて意見をしたりもする。

そんなだから、店員さんが手空きの時に話を聞くようになった。

「ねえ、今日、これからヒマ？」

雑誌コーナーを物色していた私に、そつと近寄って来た店員さんが声をかけてくる。

「え？ ああ、驚いた。佐山さんかあ、びっくりするじゃない」

私は手にしていた雑誌を棚に戻すと、声をかけてきた顔馴染みの店員、佐山さんに笑いながら返事をした。

「あたしね、もうすぐ上がるんだけど、そこのお店でお茶でもどう？」

そう言っただけにあるファストフードの店を指差す佐山さん。

何か目的の物があつた訳でなし、時間潰しに雑誌を見に来ていた私は、佐山さんの申し出にすぐさまOKを出した。

「じゃあ、私、先に行って待ってるわね」

私は手頃な一冊を棚から抜き出すと、佐山さんに手を振ってレジへ向かった。

お昼時にはまだ時間のあるファーストフード店はガランとしていて、ゆっくりできそう。

大声ではしゃぎ回る子供も、傍若無人な学生達もない。

終日禁煙になってタバコが吸えないのは残念だけど、この静けさには代えがたい。

アイスミルクティーを求めると、窓際の席に座って買ったばかりの雑誌をめくる。

十分程待つと、仕事を終えた佐山さんがやって来た。

「ごめんね、待たでしょ？」

ポテトとコーラの載ったトレイを手にした佐山さんが声をかけてくる。

「気にしないで。どうせ家にいたって、誰もいないんだし。こうやって佐山さんと話をしてた方が、私も楽しいわ」

我が家には子供がいない。欲しくなかった訳ではない。私に問題があるのか、主人に問題があるのか、はたまたほかに何かあるのか、私達夫婦に子供が授かる事はなかった。

主人が仕事に出かけてしまえば、残された私は一人、時間を潰すしかない。外に出て仕事をする事も考えたけど、それは主人に却下されてしまった。

「あ、コレ、食べてね」

私の向かい側に座ると、佐山さんはトレイの上のポテトを勧めてくれる。

汗をかいいたカップを手にして中身を一口すすり、彼女は大きく息をつく。

「今日はどうしたの？ 何だか話があるみたいだったけど」

ポテトを口に運びながら、佐山さんに水を向けてみる。

「そうそう。ちょっと話を聞いて欲しくて」

途端に佐山さんは身を乗り出してきた。

「うちのコンビニって、駐車場広いじゃない？ おつきい通りの近
くだから、夜でもお客さん多いし」

佐山さんの話によると、こうだ。

ファストフード店と隣接し、大手ラーメンチェーン店と敷地を同じくするために、コンビニの駐車場には深夜になっても車が途切れる事はない。

そのせいか、家庭ゴミを持ち込んでコッソリと捨てて行く不心得者が後を絶たないのだとか。

「それも、可燃ゴミとか不燃ゴミとかじゃないのよ」

動かなくなつた扇風機、使えなくなつたガスコンロ、破れてスポンジの飛び出した座椅子、折りたたみのスチール椅子、引越しの時に不要になつたのだらう古いエアコンやストーブ。

果ては事故で外れてしまつたらしき車のボンネット。処分に困つた古タイヤを置いていく強者もいるらしい。

「見つけた以上は、そのままにしておく訳にもいかないじゃない？
だけど普通のゴミとかビン・カンなんと違って、ゴミの日にまとめて持つて行つてもらつても無理な訳よ」

「そうよねえ。そのラインナップを聞く限りじゃ、粗大ゴミだもんねえ」

アイスマルクティーを口に運びながら、佐山さんの話に相槌を打つ。

「でしょ？ 結局、うちのお店から業者に連絡して引き取ってもら
う事になるんだけどさ。物が物だけに、処分料金がかかるじゃない？
不燃で持つてってもらえる物はいいけど、それ以外の物って、
うちで処分料払うのよ。でもそれって、おかしくない？」

だんだんと佐山さんがヒートアップしてくる。

「ちょ、ちよつと佐山さん、落ち着いて」

慌てて彼女の前で手を振り、どうどうと落ち着かせる。佐山さんもハフウと息を吐いて、背もたれに寄りかかる。

「ごめん、話してたらテンションが上がってきちゃった。なんかこ

んな事が続いて、お店の持ち出し分が増えちゃったせいで、本部から色々と言われたらしいのよ、うちの店長。そのせいでイライラしてるみたいでさ。働いてることとまで、ピリピリしちゃうわよ」

事実、つまらないミスをあげつらっては叱責される、と言うことが増え、スタッフの間に流れる空気は最悪なんだとか。

「それでね。これ以上雰囲気が悪くなるのも嫌だからって、スタッフでも注意してたのね。ゴミ置き場にネットをつけたり、大きい物が置けないように囲いをつけたり」

夜シフトのバイトに入る人が、時間のある時に見に行ったりもしていたようだ。

「ふうん。で、効果はあったの？」

残り少なくなったポテトを口の中へ放り込み、噛み締めながら佐山さんは複雑な表情になった。

「う……ん。多少は効果があったのかな。家庭ゴミや粗大ゴミなんかにはね」

「他に何か問題でも？」

私の問いにどう答えようかと悩むように、彼女は手にしたカップのストローを抜き差ししている。そのたびにカップの中で、クラッシュアイスがザクザクと音を立てた。

「何か変な事でも？」

「それがさあ。朝から変な物、見つけちゃって」

佐山さんは今朝、六時からのシフトだったそうだ。

習慣として、仕事を始める前にゴミの確認をするようにしていて、今朝も店舗の裏を見に行ったんだとか。

「目立つ所にゴミが置いてあると、『ここに捨てていいんだ』って思っちゃうじゃない？ だから、出来るだけキレイにしておこうと思って。そうしたら、うちのコンビニで使ってるのとは違う袋が置いてある訳よ」

白い半透明のビニール袋。その中には幾つもの茶色い紙袋。よほど見られたくない、知られたくない物が入っているのだろうと、容

易に想像する事が出来た。

「持ち上げてみると軽いんだけど、もしも危険なモノだったらヤバイでしょ？ だから店長が来るまで待って、一緒に確認しようと思っ
つて」

一人で確認するの嫌だったし。そう言っ
て佐山さんは肩をすくめた。

店長に事情を説明し、二人でビニール袋の結び口を解き、中身を確かめることにした。入れられていた紙袋は、表面がデコボコとしており口を無造作にひねって閉じられている。その形容から、ある程度の硬さを持つ物が詰め込まれていると想像できた。

店長が恐る恐る紙袋を開く。口を開き、中を覗き込むなり、店長は「うっ！」とうめいてのけぞった。

「どうしたんですか!？」

と近寄る彼女に向かって、店長は紙袋の中身をザラザラと引つ繰り返して見せた。

「中身を見たあたしも、思わず叫びそうになったわよ」

そう言っ
て佐山さんは携帯電話を取り出しいくつかのボタンを操作した後、画面を私に見せてくれた。

「コレが入ってたのよ」

彼女の携帯画面に映し出されたのは、段ボール箱に入れられた無数の人形の腕。

古いモノ、新しいモノ、汚れているモノ、布製のモノ、右腕、左腕、ぬいぐるみの腕。

考え付く限りの人形の腕が箱の中に散乱している。

「気味が悪いでしょ？ 入ってた紙袋の中身、全部コレなのよ」

これだけの数の腕を集めるために、一体どれだけの人形を壊したのだろう。十体や二十体という話ではない。

肩の可動域で引き抜かれたモノから、ハサミで切り裂いたモノも力任せに引き千切られたモノもある。

人形の腕とは言え 人形の腕だからか 籠められた悪意が携

帯の画面から吹き付けてくるみたいだ。

昼間だと言うのに、足元から冷たい空気が昇ってくる気がした。

「……コレ、どうするの？」

パタンと携帯をたたみ、佐山さんはフウツと息を吐いた。

「誰が置いたのか分かれれば、突っ返してやるんだけどね。でも誰だか分かんないし、外に出しとく訳にもいかなんじゃない？ 仕方がないから、箱に詰めて事務所に置いとくんだった」

「えー？ それって気持ち悪くない？」

「気持ち悪いわよ！ 今のところ、知ってるのは店長とあたしだけなのよね。だから、事務所に入るたびに、見たくないのに見ちゃうの。この箱」

怖いモノ見たさ、ってやつか。佐山さんの気持ちは分からないでもない。私が彼女でも同じように思うんだろう。

話して何がどうなる訳でもないけれど、それでも誰かに聞いて欲しかったんだと彼女は苦笑した。

「だってお店の子に話す訳にはいかないし。でも、自分一人の中にしまったおけるような話でもないし。ごめんねえ、気持ち悪い事聞かせちゃって」

一通り話して気が済んだらしい佐山さんと別れ、家へと帰る。

「ただいまー」

小さく呟いて居間のドアを開ける。私の声に応えてくれる者はいない。

テレビを点けると、お昼番組のにぎやかな笑い声が居間に流れる。バラエティにも、それに出ているお笑い芸人にも興味はないけど、静まり返った空間に一人にいるよりもマシだと思った。

佐山さんと時間を潰したせいで、昼食には中途半端なタイミングだけど、今食べておかないと夕食まで空腹のままになってしまう。

キッチンへ向かうと冷蔵庫を開け、物色する。

「簡単でいいよねー」

誰に聞かせるためでもなく、ただ自分のために声を出す。淋しい

クセだとは思う。だけど独り言をやめてしまつたら、しゃべり方を忘れてしまふんじゃないかとも思つてしまふ。

食パンにピザソースを塗り、ハムと昨日の残りのホウレン草のソーテー、とろけるチーズを載せてトースターで焼く。ちよつとだけ手間をかけて紅茶を淹れる。

自分のための食事の用意なんて、こんなものだ。どんなに手間ヒマかけて作つた料理でも、一緒に食べてくれる相手がいなければ美味しくとも何ともない。

【「なんちゃってピザトースト」の香ばしい匂いが漂い始めた頃、電話が甲高い電子音で着信を告げた。

「はい、倉田でございます」

受話器を耳に当てると、聞き慣れた主人の声が届く。

「ああ、もしもし？ 佳子か？ さつきも電話したけど、どっか行つてたのか？」

私が留守の間に、一度電話をしたらしい。

「そうなの？ ごめんなさい、佐山さんとお茶してたから」

「佐山さん ああ、コンビニの店員さんか。お前と仲がいいって言う」

「そうそう、その佐山さん。彼女からね、ちよつと変な話を聞いたのよ。帰つたら教えてあげるね」

「んー、それがなあ。今晚、遅くなりそうなんだ」

「え？ だつて、あなた、最近ずつと忙しかったから今日は早く帰るつて。だから今晚は、あなたの好きな献立にしようと思つて、私、張り切つてたのよ」

「そんな事言つたつて、仕方がないだろう。こっちは仕事してるんだ。それぐらいお前だつて分かるだろう」

何よ、ソレ？ まるで、仕事をしている自分が偉くて、家にいる私が駄目な人間みたいな言い方じゃない。

「何時に帰れるか分からないから、待つてなくていいぞ。じゃあな」
私の返事を聞きもせず、主人からの電話は一方的に途切れてしま

った。

虚しく音を吐き出し続ける受話器を戻す頃には、すっかり食欲をなくしてしまっている自分に気が付いた。

トースターの中に入れっぱなしになっていたせいで、パンの水分は完全に飛んでしまっている。食欲があつたつて、食べようと思うシロモノじゃないだろう。

もったいないという気持ちはあつたけど、取っておいてもきつと食べない。少しだけ後ろめたく思いながら、それでも主人への腹立ちの方が勝つて　結局、ゴミ箱へ捨ててしまった。

すっかり冷めてしまった紅茶を口に含むと、ただ甘さだけが残る。そしてそれは、渋味を伴った苦みへと変わる。

まるで今の私の気分みたいに。

何だかもうどうでも良くて、紅茶も流しに捨ててしまった。

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、居間のソファに身を沈める。

二人しかいない夫婦なのに。いつからこんな風にすれ違うようになってしまったんだろう。

新婚の頃だつて忙しかつたけど、もつと会話もあつたし、二人の時間だつてあつた。

結婚から数年経つても、子供が授からない事に不安を持ち始めた頃からだろうか？　それとも、もつと以前から？

帰宅の時間が遅くなる日が続き、二人で夕食を摂る機会もめつきり減つてしまった。私が就寝してから主人が帰つて来る夜が増え、会話もなく主人が出社していく朝も増えた。

どんどん心を重くしていく思考の渦から抜け出そうと、ミネラルウォーターを口にする。

ガラス製のローテーブルの下に視線をやれば、オレンジ色の小物入れが。中身は作りかけの人形と、その材料の紙粘土。

先日久し振りに会った友人が、暇潰しにいいわよ、と教えてくれたプチアートだ。紙粘土で人形やミニチュアのインテリアを作り、

絵具で着色する。

細々した作業は、殊の外、私の性に合っていたらしい。作っている最中は、余計な事を考えないで済んだ。

どうせ今夜も私一人。主人の帰宅時間を気にして食事の用意をする必要もない。

私は小物入れをローテーブルの下から引っぱり出し、フタを開けた。聞く気もないバラエティの笑い声をBGMに、容器の中から作りかけの人形を取り出した。

掌に乗せて、色んな角度からながめて見る。一度乾いてしまったら、作り直しがきかないのが紙粘土。歪な形で固まってしまった人形は、まるで今の私自身のようで 見ているのが嫌になる。私は目を閉じて大きく息を吐くと、手の中の人形をゴミ箱へ投げ入れた。ウエットティッシュのボトルを引き寄せ両手を拭い、パックに保存してある新しい紙粘土を取り上げる。

必要な分だけを指で千切り、小さく丸めて体のパーツを作っていく。爪楊枝の先で凸凹をつけながら、私は佐山さんから聞いた話を思い出していた。

『ビニール袋に詰め込まれた人形の腕』

一体誰が、何の目的でそんな事をしたのか、無性に気になる。

「何を思っ、そんな事したのかしらねえ」

独り言を呟きながら、手の中の紙粘土に細工を続けた。

週が明け、冷蔵庫の牛乳が切れているのに気付いて、コンビニへ向かう。ついでに何か、つまめる物があるといいんだけど。

店内に入ると、佐山さんがレジにいるのが見えた。

「いらつしゃいませ」と声を掛けてくる彼女に軽く頭を下げて、カゴを手到店内を回る。

牛乳とスナック菓子の袋をカゴに入れ、佐山さんの前へ。

「お願いします」

「はい、いらつしゃいませ」

バーコードをスキャンしていく佐山さんに、さりげなく話を振る。

「例のアレ、その後どうになりました？」

彼女はチラツと私の後ろを見て、他のお客さんがいないのを確認すると声を潜めて言った。

「実は、まだ続いてるのよ」

「ええっ、そうなの？」

「後で電話してもいい？」

「そうして。私も気になるし」

佐山さんからボールペンを借りると、レシートの裏に自分の携帯番号を書いて手渡した。

次のお客さんが並んだ気がする。

「じゃ、また後でね」

そう言って手を振ると、商品の入ったビニール袋を受け取ってコンビニを出た。

自宅へ戻り、窓を開けて部屋に風を通す。今日は、うちに来てもらってゆっくり話そう。どうせ夫は、私の起きているうちには帰宅しないんだから。

お茶の用意をするために、ケトルをガスにかける。ソファの周りをザツと片付け、ローテーブルの上の雑誌をラックに放り込む。

トレイにカップを並べ、ハーブティーのボトルを開けた時、カウンターの上の電話が鳴った。

佐山さんに渡したのは、私の携帯番号。ならばこの電話は彼女ではない。

ディスプレイに点滅しているのは、“非通知”の文字。これを見ただけで、どのような電話なのかおおよその見当がつく。

小さくため息を吐き、受話器を耳に当てる。

「もしもし、倉田ですが」

私の言葉に返答はない。受話器の向こうで息を潜めてこちらを伺っている気配がする。

「もしもし？」

黙っている相手に語りかける事程、苛立ちと徒労感をもらたすも

のではない。大きく息を吐くと、私は電話の主に告げた。

「切ります」

せめてこっちから切ってやろうと思ったのに、相手は私の言葉を聞くなり、一方的に通話を終了させてしまった。

何度目かのため息をつき、受話器を戻す。

「はあ……またか」

佐山さんから初めて話を聞いたあの日、主人から遅くなると連絡があったあの日、あれからかかって来るようになった無言電話。

多い時は一日に四、五回かかって来る。それも、主人のいない日中を狙って。

主人にも話してみたけど、「間違い電話じゃないのか」「気にするな」で終了。私の話の内容をすっかり聞いてくれていたのかさえ怪しい。

最近はずっとこんな感じだ。まともに顔を合わせて話をする事も、めつきり減ってしまった。こんな状態で、夫婦と言えるんだろうか？
胸の奥に大きくて重い石を抱えたみたいないな気分ですわに腰掛けると、ローテーブルの上の携帯電話が鳴り出した。

ディスプレイの番号は知らないものだけど、このタイミングで電話をかけて来るのは佐山さんしかいないだろう。

「はい、もしもし？」

『あ、もしもし、佐山ですけど。倉田さん？』

「うん。もう仕事、終わったの？」

他愛のない、日常の挨拶だけ。今の私にとって何よりも有り難いもの。

「うちに来て話さない？ 場所、分かる？」

『前に教えてもらったよね。確か、通りの斜向かいにある、倉庫の二件隣だっけ？』

「そうそう。窓から見てて、声かけるから」

『分かった。よろしくね。じゃあ』

コンビ二からなら、うちまで五分とかからない。

ちょうど湯気を吐き出し始めたケトルをガスから外し、ポットに移してから窓辺に立つ。

程なくして、門の前に佐山さんの姿を認めた。

「佐山さん！」

窓を開けると、私は彼女に声をかけた。

「ちよつと待つててね。今、玄関を開けるから」

佐山さんが笑ってうなずいたのを確認して、玄関へ小走りに向かう。鍵を外してドアを開ければ、片手を挙げて佐山さんが声をかけてくる。

「ごめんなさいね、ゆつくりしてるとこに」

彼女を招き入れながら、その言葉に苦笑した。

「何言ってるのよ。どうせ一人で時間持て余してるんだから、遠慮なんてしないで」

用意しておいたカップを並べ、ゆつくりとハーブティーを淹れる。

「ごめんなさいね。こっちから誘ったのに、大したモノ出せなくて」
お菓子を盛った皿をテーブルに置き、佐山さんに勧める。

ひとしきりお茶で喉を潤した後、彼女はポケットから携帯を取り出すと口を開いた。

「それでね、例の話なんだけど」

「そうよ、あれからどうなったの？」

話の前に、ちよつとこれ見てよ。そう言っただけで差し出された携帯の画面には、以前と同じような人形の部品が写し出されている。

「……何よ、コレ」

一枚目の写真には、カッターナイフのような刃物で傷付けられた人形の胴体部分。二枚目には引き抜いたと思われる、人形の髪の毛。三枚目には目の部分をくり抜かれた頭部。四枚目には、その眼球部分。

「どんどん酷くなってるような気がするんだけど」

携帯を返しながら感じた事を口にする、受け取った佐山さんもうなずく。

「やっぱり倉田さんもそう思う？ 何だか、こう、物凄い恨みとかが漂って来るじゃない。気味が悪いとか言うレベルを通り越してるよね」

少しの間、私達のいる空間に沈黙が流れた。心なしか下がってしまつた体温を上げようと、ハーブティーを口に運ぶ。

トゥルルル

沈黙を裂く電話の呼び出し音に、二人してビクツと飛び上つた。

「あ、ああ、ちよつとごめんなさいね」

佐山さんに断つて、キッチンカウンターの電話に出る。

「はい、倉田でございます」

受話器を取る直前にチラツと目にしたディスプレイの文字は、「非通知」。

嫌な予感がしたけど、私一人でいる訳でもないので、鳴らしつ放しにも出来ない。案の定、耳に当てた受話器から言葉が返ってくる事はなかった。

「はああ」

佐山さんがいるにも関わらず、私は思わず大きなため息をついてしまった。その瞬間、受話器の向こうでかすかに空気の動いた音がした。

笑つたのだ。そう気が付いた途端、相手は電話を切ってしまった。

「どうしたの？」

佐山さんが声をかけてくれて、私は我に返つた。

「え？ ああ、何でもないの」

受話器を戻すと、横に置いておいたハーブのボトルを持ち上げる。それをテーブルにあつたティーポットと交換してキッチンへ。

「何でもないって顔じゃないわよ。あたしじゃ頼りないかも知れないけど、話を聞くぐらいは出来るんだからね」

むっつ、と頬をふくらませる彼女の顔を見て、つい吹き出してしまふ。

「あー、笑つたわね」

「フフツ、ごめんごめん」

キレイに洗ったポットをお湯で温め、佐山さんのところに戻る。

「実はね」

新しいハーブティーを淹れながら、私はここ最近続いている無言電話の事を説明した。ひとしきり私の話を聞いた佐山さんは、眉間にシワを寄せて口を開いた。

「ねえ、それって、ご主人に言った？」

「うん。無言電話が始まってすぐに主人には言っただけ。でも全然相手にしてくれないの」

二つのカップにハーブティーを注ぐ。爽やかな香りが室内に漂う中、クセなのか人差し指の第二関節を噛みながら佐山さんは考え込んでいる。

「佐山さん？」

ハーブティーのカップを勧め、彼女に声をかけると難しい表情のまま私を見る。

「ねえ、間違ってたらごめんなさいね。もしかしてそれって、ご主人の」

言いにくそうに語尾をぼやかす佐山さんに、私も肩をすくめて答えた。

「あなたもそう思う？」

主人の態度がよそよそしくなり、家に寄り付かなくなった。それと時を同じくして始まった無言電話。『もしかしたら？』という思いは常にあつたけれど、その考えを肯定するのは嫌だった。

「さっきの電話でね、私も確信が持てたわ。電話の向こうで、笑ったのよ。こっちの様子を伺うみたいに。あれは女だわ」

話をしながら、私は自分の言葉を否定する。

あれは「楽しんで」いたのだ。無言電話と主人の態度に疑心暗鬼に捕われていく私を思い描き、哀れみ、嘲笑っていたのだ。主人に相手にされていない私を、受話器の向こうの女は勝ち誇って笑い声をあげたのだ。

「あたしが言う事じゃないと思うけど……。大丈夫なの？」

少しの間黙り込んでしまった私に、佐山さんが心配そうに声をかけてくれた。

「ありがとう、大丈夫よ。何となく予想はしてたし」

苦笑してカップに口をつける。そして彼女に言った。

「ごめんね、変な話聞かせちゃって」

妙に沈んでしまった空気を拭うように、私と佐山さんは他愛のない話をし、コンビ二に持ち込まれる得体の知れないゴミとその持ち主について推測を交わした。

「もうこんな時間？ そろそろ帰らなくちゃ」

佐山さんがそう切り出したのは、陽も傾き、風も涼しくなった頃。「ごめんなさいね、長々と引き止めちゃって」

玄関へ向かう佐山さんを送り出しながら、私は笑顔で声をかけた。「ねえ、話を蒸し返すようで悪いんだけど。ご主人の事、はっきりさせた方がいいかもよ」

靴を履いた彼女が振り返り、心配そうに口を開く。

「う……。ん。でも、そうと決まった訳でもないし」

あいまいに笑って見せる私に、佐山さんが続けて言う。

「倉田さんの家庭の事だから、あたしがとやかく言う筋合じゃないけど。だけど、万が一の時のために、記録はとっておいた方がいいかもよ。無言電話のかかってきた日時とか、ご主人の帰りの遅い日とか」

真剣な口調で話してくれる佐山さんの全身から、心配してくれている気持ちかがヒシヒシと伝わってくる。

「そうね、ありがとう。そうしてみるわ」

困った事や嫌な事があつたら、いつでもメールして、との言葉を残し、佐山さんは帰って行った。

食器を片付けようとリビングに戻って、思う。誰もいない部屋っ

て、こんなにも広がったかしら、と。

すっかり体に馴染んでしまったため息を吐き出すと、食器を流しへ運ぶ。どうせ今夜も主人の帰宅は遅いのだろう。そう思ったら、急いで食器を仕舞う気にもなれず、そのままにしてしまった。

ソファに深く腰かけ、視界にも思考にも入れないようにしていた雑誌ラックへ目をやる。放り込まれた雑誌や新聞の間に、A4版の茶封筒が入っていた。中身は分かっている。頼んでおいた書類と写真が数枚。

昨日の朝届いたのだけれど、ラックに放り込んでそのままにしておいたのだ。

ほんの一瞬だけ、どうしようか迷い 私はラックからその茶封筒を抜き出した。封を切り、納められていた書類に目を通す。

面白くもない文字の羅列を追いながら、頭の中を様々な考えが浮かんでは消えていく。

書類から顔を上げ、ふうっ、と大きく息を吐いて目を閉じる。

次々に頭の中を横切っていった思考の波の中から、幾つかのものが浮かび上がってきた。佐山さんの話、見せてもらった数枚の写メ、コンビ二に持ち込まれるビニール袋、人形の部品……。

「そつかあ。そうよねえ」

閉じた目蓋の上に腕を寄せ、私は自分が久し振りに笑っているのを感じていた。

「何だか最近、顔色がいいんじゃない？」

佐山さんが私の顔を見て、嬉しそうに声をかけてくれる。

「表情も明るくなったみたいだし」

「そう？　じゃあ、ストレス発散がうまくいってるのかな」

彼女の様子に、私も少し嬉しくなる。

『たまにはさ、外で食事でもしない？　家の中にずっと籠もってる
と、気が滅入っちゃうでしょ？　あたし、今日は五時であがりだか

ら

佐山さんからそう連絡が入ったのは、昼過ぎの事だった。

きつと、あの時の事を気にして誘ってくれたんだと思う。私は佐山さんの心遣いを有り難く受ける事にした。

「その様子だと、問題は解決したのかしら？」

テーブルに運ばれてきたセットのサラダをつつきながら、佐山さんがこちらへ探りを入れてくる。

「ふふ。残念ながら、解決はしてないの」

目の前にあるコーヒーカップにミルクを注ぎ、私は彼女に答える。
『全て解決して、何の問題もないわ』と言えればどんなに良かったか。

でも、そうは言えない。相変わらず主人の帰りは遅いし、無言電話も続いている。それどころか、今では休みの日まで言えを空けるようになった。きつと女性の所へ行っているのだろう。

「それなのに？ 何でそんなに楽しそうにしているの？」

フォークに刺したレタスを口へ運ぶ事も忘れ、心底不思議だと顔中で表現しながら佐山さんが問う。

「んー。考え方を変えたからかな。『そうなのかも知れない』って疑ってる間はすごく苦しかったけど、認めちゃったら、何だか逆に落ち着いちゃったのよ。主人が勝手にしてるんだったら、私も勝手にさせてもらおう、って」

コーヒーに口をつけ、さらに続ける。

「それに、さつきも言ったけどね。ストレスを発散する、いい方法も思いついたから」

私の答えを聞いた佐山さんが、ため息をついて首を振る。

「へええ。すごいわね、倉田さん。あたしだったら、絶対にムリだわ。あなたみたいに落ち着いてなんかいられないわね。それこそ刃物持ち出して、相手の家へ乗り込んでんじやうかも」

「うん、実は、私もそれ考えた」

流石に実行には移さなかったが、その考えが私の中にあっただのも

事実である。

「でも、まあ、倉田さんが元気そうで良かったわ。　　って、良くないか。解決した訳じゃないんだし」

佐山さんは、どう捉えていいのか迷っているんだろう。複雑な表情をしている。

「心配してくれて有り難う。本当に大丈夫よ。空元気じゃないから、安心して」

彼女に笑いかけると、私も並べられた料理に手を伸ばす。

「あ、ねえ。さっき言ってたストレス発散の方法って、どんなの？」
テーブルの上の皿があらかた片付いた頃、思い出したように佐山さんが質問してきた。

皿を下げて来た店員にコーヒーのおかわりを頼み、私は佐山さんに向き直った。

「ネットのね、アンケートモニターに登録したのよ。そこで、いろんなコンビニスイーツのレビュー依頼があつて。この年になって『やけ食い』ってのもみつともないでしょ？　でもこれなら『レビューを書くんだから』って言い訳も出来る訳よ。で、そのコンビニスイーツを夜中に、散歩がてら買いに行くの。レビューの依頼だから、ちゃんとレシートを送ればお金も戻ってくるし」

私の説明に佐山さんも納得する。

「趣味と実益を兼ね備えたってヤツね。あたし達ぐらいの年齢になると、甘い物を食べるにも言い訳が必要になってくるし」

「でしょ？　でも、太るわよ、やっぱり」

穏やかな空気の中、食事を終えた私達は、佐山さんの仕事が翌日は休みと言うこともあつてそのままアルコールへと移っていった。

「ねえ、そう言えば佐山さんの方はどうなの？　あの深夜のゴミ捨て犯」

アルコールによって程良く酔いが回ってきた頃、私はそう切り出した。

「『深夜のゴミ捨て犯』？　何だかそう言つと、ミステリーみたい

じゃない。すごいネーミングね」

「夜中にこっそり意味の分からないゴミを捨てて行くって、十分にミステリーだと思うけど」

「確かにそうかもね」

あはは、と笑う佐山さんにつられて私も笑う。

「少しはおさまってきたの？」

「うん。エスカレーターしてきた感じ。この頃じゃあ、人形だけじゃなくて、写真とかまで捨てられるようになってきてね」

「写真？」

口当たりのいい甘く香るカクテルを含み、佐山さんに先を促した。
「どうやらね、隠し撮りをした写真みたいで。男女二人組が写ってるらしいんだけど、顔までは判別できないの」

ハマっていると言う焼酎のグラスに浮かぶ氷の塊を指先で沈め、
頬杖について鼻の頭にシワを寄せる佐山さん。

「顔が写ってないって事？」

「それが違うのよ。多分、顔もハッキリと分かるように写ってるわね、あれは。探偵とか使って撮ったんじゃないかしら」

香りと口当たりにだまされてしまうが、ブランデーベースのカクテルは思っていたよりもアルコールが強いらしい。私も佐山さんと同じように頬杖をつき、グラスに添えられたレモンを指先で液体の中へと沈める。

「それじゃあ、その写真って」

「うん。浮気の証拠写真じゃないかって思ってるんだ。でね、塗り潰されてるのよ。二人の部分だけ黒いペンで丁寧に、しつこいくらいに。他にも、空いてるスペースには細かい文字でビッシリと『殺してやる』とか『死ぬ』とか書き込んであるし。もう、軽くトラウマよ」

佐山さんは下唇を突き出すと、ぶふーっと息を吹き前髪を揺らした。そのうんざりとした様子に、私は苦笑するしかない。

「写メ、まだ撮ってるの？」

「うつん、もうやめたわ。だって何だか、嫌じゃない。こっちの携帯までどうにかなりそうで」

「ああ、そう思うよね。やめて正解だと思うわ」

その後は二人してお酒を飲みながら、日々や仕事のグチを交わして過ごした。

店を出て佐山さんと別れ、家に帰り着いたのは夜の十時半を少し回った頃。玄関のドアを開けると、リビングに明りが点いているのに気付く。

視線を向ければ、上がり口に主人の革靴が脱ぎ捨てられている。普段ならば、こんな時間に帰って来る事は、まずない。

「ただいま」

様子を伺いながらリビングのドアを開けると、ソファに腰かけてビールを飲み、テレビを見ている主人の姿があった。

「今頃まで、何してたんだ。ずい分と遅いじゃないか」

私が声をかけると、不機嫌そうな表情を浮かべて言い放つ。ご丁寧に、手にしたビールの缶を乱暴にテーブルに置くという、おまけ付きで。

「佐山さんと食事に。今夜も帰りは遅いと思っていたから」

バッグをダイニングテーブルに置いて、冷蔵庫からミネラルウォーターのボトルを出す。良く冷えた水で喉を潤し、火照った頬をボトルに当てて言葉を返す。

「何だ、お前。酒飲んでるのか？」

私を見る主人の目が怒りを含む。

「食事の後に少しね」

「亭主が外で一生懸命働いてるって言うのに、女房は優雅に酒飲んでご帰宅はな。まったくいい身分だよ、お前は」

棘をまとった言葉が次々と飛んで来る。

「だってあなた、こんなに早く帰って来る事なんてないじゃない。私だって楽しく夕食を食べたっていいでしょ？ あなたみたいに外に付き合いがある訳じゃないんだし」

いつも私を放ったらかしにして、自分はある女と一緒にいるくせに。私を一人にして、淋しい食事をさせているくせに。たまに私が外出をしたからって、どうしてそんなふうに言われなくちゃならないのよ？

「佐山さんなんて言っつて、本当は男でもいるんじゃないのか？」

外したネクタイを缶ビールの横に放り出し、主人がボソリと呟く。売り言葉に買い言葉というヤツだろう。だけど主人のその言葉を聞いた瞬間、私の中に怒りが湧き上がってきた。

責められるべきは、主人のはず。なのに何故、私の方がこんな事を言われなくてはならないのか。

「どこかの心理学者が言っつてたけど、人の行動を疑うのは自分にやましい気持ちがあるからなんですって」

明らかな敵意を籠めて、主人に嫌みをぶつける。私に反論されるなんて思っつてもいなかったのだろう。グツと口唇を引き結んでソファから立ち上がる。

「夕食は？ 簡単なもので良ければ作りますけど」
返事は分かっている。

「いらん。もう休む」

思っつた通りの言葉を残して、主人はリビングを出て行っつた。

いつもより大きな音を立てて閉まっつたリビングのドアを見つめ、私は佐山さんと過ごした楽しい気分が消え去っつているのを感じていっつた。アルコールのもたらししてくれる酔いも、すっつかり覚めてしまっつた。

今寝室へ向かっつても、気まづい空気の中、主人と一緒にいなければならぬ。それに、こんなに気持ち荒れていては眠れそうにない。

私は大きいため息をつくと

「ストレスは、発散しないとね」

今夜は、どこのコンビニにしよう？ 頭の中で周辺にあるコンビニを思い描きながら、流しの下に仕舞っつてあっつた小さな袋を手に取り

る。

「新しいスーツが出るって言ってたわよね、確か。あそこのお店にしようっと」

気分を落ち着かせるためなのか、それとも盛り上げるためなのか。自分でも良く分からないまま、口から飛び出す独り言が止まらない。財布と袋をバッグに入れ、そっと玄関を出た。すっかり静まりかえった町の中を、自転車で走り抜ける。顔に当たる夜の風が心地よい。

うちから一番遠いコンビニの前に自転車を停めた。もう真夜中近いというのに、煌々と灯る明りが眩しい。夜道を帰る人にとって、この光は安心を与えてくれるものなのだろう。

店内には店員を含め、三、四人の姿が見える。私はそっと店先に並べられたゴミ箱に近付いた。

バッグの中に入れた指先が、カサコソと音を立てる袋に触れる。クシャクシャに丸めたソレを、様々なゴミ＝不要品であふれかえる箱の口へ突っ込んだ。

『不要品』。そう、私には不要なモノ。必要のないモノ。私の中から湧き出してくる不要なモノを、私から切り離して捨てるのだ。

雑誌や新聞紙、食べ物の容器や包み紙、油脂のシミや泥にまみれたゴミと一緒に。悪意を籠めて。

心なしか、胸の奥が軽くなったような気がする。お店で気に入った雑誌と新作スーツを買い求め、夜道を再び自転車で走る。

「不要なモノは捨てましょう。集めて、丸めて、ゴミ箱へ。焼いて、燃やして、きれいサッパリ消し去って。気に入らないモノなんか、まとめて捨ててゴミまみれ」

歌うように節をつけて呟く。

佐山さんは知らない。私が、どれだけ深い闇を抱えているのか。

今はもう、プチアートを作ってはいない。今私が作るのは、自分の心をなぐさめるための、心に溜まり続けていく怒りや不満を吐き出すためのモノ。

先程のコンビ二に捨ててきた袋の中には、紙ねんどで作った稚拙な人形。精巧である必要はない。肝心なのは「人の形をしている」事。

洗濯物のカゴに放り込んであった主人のシャツ。それに付着していた、私のものではない長い髪を集め、数本を仕分け用の小さなビニール袋に保管しておいた。

人形を作る時に、一本ずつ髪を紙年度の中に埋め込む。そうして人形は私にとって「あの女」になる。

興信所を使って調べさせた。主人と付き合っているのは、主人と同じ部署で働く女だった。直接の部下ではないけれど、同じフロアに勤務している。

そう、私より若い女。私と違って、子供を授かる可能性のある女。主人が子供を欲しがっているのは知っていた。彼女が妊娠でもすれば、主人は大喜びで私を捨てるだろう。私がゴミ箱に捨てた、紙ねんどの人形のように。

正直に言って、自分の中に主人への愛情が残っているのか、この行動が愛ゆえのものなのか、分からない。

それでも私は、主人と相手の女を許す気にはなれない。

確かに私達夫婦の関係は冷え切ってしまった。だけど、その関係を修復するチャンスがなかった訳では、ない。あの女の存在さえなければ。

二人の写った写真を切り抜き、カッターでズタズタにした事もある。ボールペンのインク一本を使い切って、真っ黒に塗り潰した事も、余白の部分に呪いの言葉を書き込んだ事もある。

でも一番心がスッキリしたのは、人形を使った時だ。

あの女に見立てた人形を何体も作った。女の髪を埋め込んだ人形。丹念に、時間をかけて、壊してあげた。

両手両足を切り落とし、胸に針を刺し、首をもいだ。両目の部分をナイフでくり抜き、火の点いたタバコを押し当てる。生ゴミの腐汁をなすりつけ、犬のオモチャにさせた事も、早朝のゴミ置き場で

カラスに突かせた事もある。

魂のない紙ねんどの人形が、それでも悲鳴をあげているみたいでスツとした。

佐山さんからの情報は、実際、とても役に立った。あからさまに隠そうとして、普通でない事をするから目立つのだ。なるべくさりげなく、その他のゴミ達と同じように捨てる。

この時に注意しなくてはいけないのは、まとめて出さない事。小分けにして少しずつ、何かのついでに捨てたと思わせるくらいの量で。

そうする事によって、捨てたモノの中身を探られるリスクも減るし、何より私自身が長く「ストレス発散」を続ける事が出来る。

このヒントを与えてくれた「深夜のゴミ捨て犯」には、本当に感謝している。顔も知らないどこかの誰かは、きっと私に似た人物なんじゃないかと、親近感すら覚える程だ。

自宅に帰り着き、リビングのソファでゆったりとくつろぐ。買ってきたばかりのスイーツをテーブルに置いて、しばらくの間目を閉じる。

あの女の分身と化した人形が、ゴミに紛れ、不要品と共に焼却される様子を思い描く。

油で汚れたお弁当の容器や、食べ残しのこびり付いたトレー、丸められたティッシュ、泥だらけの足跡や得体の知れないシミに覆われた雑誌、新聞紙の詰まった狭い箱の中にあの女はいる。

私にとってはゴミも同然。私の人生に必要な存在であるところの、主人の不倫相手。肉体を傷付ける事は出来なくても、その魂を汚す方法はいくらでもある。

絶対に妊娠なんてさせてやるもんか。二人が幸せになるなんて、許さない。

黒い喜びを噛み締めながら目を開き、スイーツを一口含んでみる。チョコレートの甘さとココアパウダーの苦味が口の中で溶け合い、心地よい香りが広がる。

この楽しみだけは誰とも共有する事は出来ない。私だけのものだ。ふと目をやれば、主人が放り出して行ったネクタイが。そして布地にからみつくようにして、私のものではない長い髪が。

お行儀悪くスプーンを口にくわえたまま、私はかすかにウェーブがかかったソレをつまみ上げた。

「あらあら、これでまた人形の材料が増えたわね」

自分自身に向けて呟くと、指先で丸めてビニールの小袋に落とすた。

「次は、どんなふうにしたら面白いかしらね？」

洋酒の香りが鼻をくすぐる甘い菓子を食べながら、私は浮かんでくる笑みを止められずにいた。

『ゴミ捨ての犯人が分かったの！』と佐山さんから連絡が入ったのは、それから一週間程経ったある日の午後。

慌てて『仕事あがったら電話ちょうだい』とだけメールを打った。彼女から携帯に電話が入ったのは、メールを送って二時間くらいしてからだった。

『ようやく誰だか分かったのよ！』

開口一番、興奮した様子の佐山さんが言う。

「さ、佐山さん、落ち着いて。詳しく教えてよ。私も気になってるんだから」

電話の向こうで、佐山さんが大きく息をしたのが聞こえた。落ち着くために深呼吸でもしたのだろう。

話をまとめると、こうだ。

不気味なゴミを捨て続ける不届者にいい加減しびれを切らした店長が、本部にかけ合って防犯カメラを設置したのだと言う。

数日ゴミ置き場を録画したところ、夜中に人目を気にするように大きなビニール袋を持ってくる人物の姿が映されていた。

店長と、事情を知る佐山さんが映像をチェックする。数回にわた

って録画されていた人物は、店長も佐山さんも良く知っている相手だった。

『半年前まで、うちのお店に勤めていた人なのよ。辞めてからも、何度も買い物に来てたんだから。もう、何だかショックで』

聞けば、コンビニの仕事を辞めてすぐの頃、ご主人の不倫が判明し、その事に悩んで病んでしまったのだとか。やり場の無い怒りを吐き出すために人形を破壊し、自宅近くのゴミ集積所にソレを捨てる訳にもいかず、コンビニに持ち込んでいたのだと語ったそうだ。

『お店としても迷惑だから、二度とこういう事はしないように、って約束して帰したのよ。知ってる相手だし、話を聞いたら警察とかに連絡するのもねえ？ 大体、罪になるのかどうかも分かんないし』佐山さんの話を聞きながら、私は流しの下に隠したビニール袋の事を思った。そして、その袋の中に入っているモノの事を。

これではもう、そのコンビニに捨てに行く訳には、いけないわね。どこかもつと、遠いお店を探さなきゃ。

まだまだ私の「ストレス発散」は続きそうだもの。こんな事で止める訳にはいかないの。

それにしても。

と私は考える。

人間って、やっぱり同じような事をするんだわ。思った通り、私とその人はとても似ている。だけど、私はもつと上手くやるわ。見つかつたりしないように。

そのためには、お店選びが大事なの。

うん、うん、と佐山さんの話に相槌を打ちながら、私は新規開拓のコンビニを求めて思考を巡らせていた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0041r/>

コンビニ夜話

2011年8月10日03時16分発行